

長野県松本市

TOSENJI

兔川寺遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1999.3

松本市教育委員会

長野県松本市

TOSENJI

兔川寺遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1999.3

松本市教育委員会

序

兎川寺遺跡は松本市東部の里山辺地区に位置します。本遺跡は埋蔵文化財包蔵地として知られていましたが、本格的な発掘調査を実施したことがありませんでした。

このたび当地に（株）テレビ松本ケーブルビジョン社屋の建設事業が計画されたため、松本市が（株）テレビ松本ケーブルビジョンから発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財の保護を図るため緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成9年5月から7月にかけて行われました。作業は天候にも恵まれ、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、平安時代前期の良好な集落址を発見することができました。また墨書土器を始めとする貴重な遺物も多数得ることができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われます。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうことは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた（株）テレビ松本ケーブルビジョンの皆様、そして地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵 公章

例 言

- 1 本書は、平成9年5月30日～7月26日に実施された松本市里山辺に所在する兎川寺遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は（株）テレビ松本ケーブルビジョン社屋建設事業にともなう緊急発掘調査であり、（株）テレビ松本ケーブルビジョンより松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、I:事務局、その他を竹原 学が行った。
- 4 発掘調査から本書作成にあたっての記録・遺物整理・報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄 百瀬二三子

遺物保存処理・復原 五十嵐周子、内沢紀代子、内田和子、洞沢文江

遺構測量 上条尚美、小松正子、丸山恵子、村山牧枝

遺物実測 内田和子、竹平悦子、松尾明恵、三宅康司、横山真理

遺構図整理 石合英子

トレース 内田和子、開崎八重子、松尾明恵

版 組 石合英子、百瀬秀俊

写真撮影 神田訓安（遺構写真）、横山和明（遺物写真）、エアテック（航空写真）

総括・編集 竹原 学

- 5 本書で使用した遺構の略称は次のとおりである。
 竪穴住居→住、掘立柱建物→建、土坑→土、ピット→P
- 6 図中で用いた方位記号はすべて真北方向を指している。
- 7 本書の記述で用いた奈良・平安時代の時期区分や遺構・遺物の分類、用語などの多くは下記文献によっている。
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 一松本市内その1― 総論編』
- 8 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下のとおりである。

表記法 土色（混入物・量） 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量

土 色

1 褐色	6 黄褐色	11 暗灰色	16 黄色	21 砂
2 暗褐色	7 茶褐色	12 黒灰色	17 暗黄褐色	22 砂 礫
3 黒褐色	8 灰褐色	13 赤灰色	18 暗茶褐色	23 緑灰色
4 明褐色	9 橙褐色	14 黄灰色	19 黒色	
5 赤褐色	10 灰色	15 青灰色	20 焼 土	

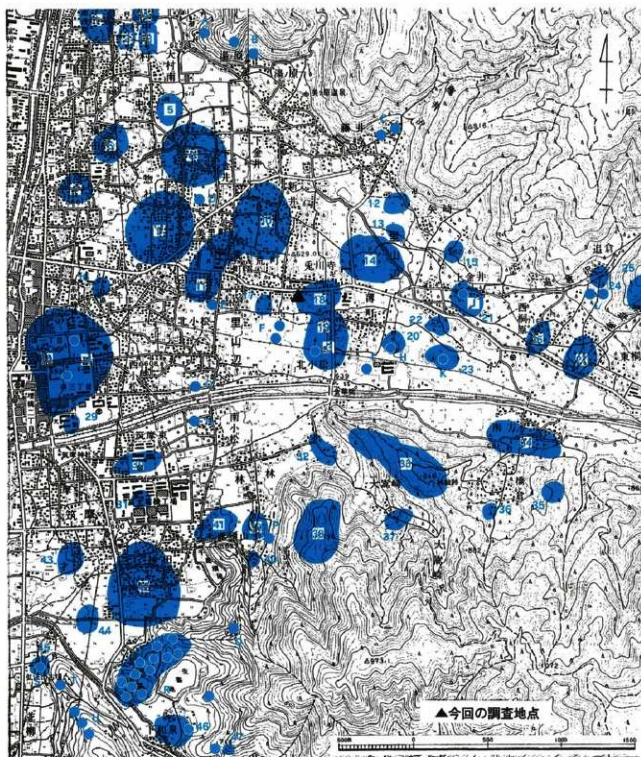
混入物

A 小 礫	F 炭化物塊	K 茶褐色土粒	P 砂 粒	U 灰色土粒
B 礫	G 炭化材	L 黄色土塊	Q 黒色土粒	V 灰色土塊
C 焼土粒	H 黄色土粒	M 黄褐色土塊	R 黒色土塊	W 赤褐色土粒
D 焼土塊	I 黄褐色土粒	N 橙褐色土塊	S 暗褐色土粒	X 赤褐色土塊
E 炭化物粒	J 橙褐色土粒	O 茶褐色土塊	T 暗褐色土塊	Y 鉄 分

- 9 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目次

序	
例言	
目次	
I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II 遺跡の歴史的環境	2
III 調査概要	3
IV 遺構・遺物	
1. 検出遺構	
(1) 竪穴住居址	6
(2) 掘立柱建物址・柱穴列	9
(3) 焼土面	9
(4) 土坑	9
(5) 銅鏡埋納遺構	9
(6) ビット	9
2. 出土遺物	
(1) 土器・陶器	23
(2) 文字関係資料	27
(3) 鉄製品	26
(4) 銅製品	26
V まとめ	53
図版	
報告書抄録	



遺跡	13 藤井	26 西桐原	39 御符	古墳	M 塚塚1・2号
1 大幡原	14 里山辺塚ノ内	27 東桐原	40 林	A 横仙園	N 巾上
2 大村立石	15 上金井矢崎	28 根町	41 千曲原北	B 御庵屋1・2号	O 北河原屋敷
3 大村前田	16 四ツ谷	29 塚橋	42 神田	C 藤井1・2号	P 御符
4 大村古屋敷	17 笠町	30 筑摩北川原	43 三才	D 惣社草塚	Q 中山31~35・56号
5 塚田	18 狐川寺	31 筑摩南川原	44 神田西	E 笠町	R 松瀬山1~3号
6 横田	19 針塚	32 林山原	45 平畑	F 大塚1・2号	R 中山36号
7 横田古屋敷	20 薄町	33 林城址	46 生妻	G 針塚	S 平畑1号
8 惣社	21 上金井	34 入山辺南方	47 弥生	H 古宮	T 弘法山
9 宮北	22 里山辺御田	35 水巻所址		I 里山辺御塚	U 中山北尾根1~3号
10 新井	23 石上	36 橋倉		J 上金井	
11 里山辺下原	24 辻倉	37 大蔵崎		K 石上	
12 藤井山田	25 桐原城址	38 林城址(小城)		L 入穴1・2号	

第1図 調査地の位置と周辺遺跡

1 調査の経緯

1. 調査に至る経過

兜川寺遺跡は松本市街地の東部、里山辺兜川寺地籍一帯に所在する遺跡である。しかし、正式な発掘調査がこれまで行われていないため、時代や遺跡の性格等、ほとんど不明なまま今日に至っている。こうしたなか、平成9年に（株）テレビ松本ケーブルビジョンの社屋建設事業が計画され、事業予定地が岡川の埋蔵文化財包蔵地である兜川寺遺跡内にかかることが判明した。そこで松本市教育委員会では事業主体である（株）テレビ松本ケーブルビジョンと遺跡の保護について協議を行い、まず当該地における遺構・遺物の有無について松本市教育委員会が試掘調査を行って確認することとし、その結果を受けて再協議を行うこととなった。試掘調査は同年4月に行われ、事業予定地内のほぼ全域にわたって平安時代の住居址をはじめとする遺構および遺物が出土、当該期の集落址の存在が明らかとなった。

試掘調査の結果をふまえ再び当事者による協議を行った結果、社屋建設による遺跡の破壊は避けられないとの結論に至り、保護措置として工事着手前に事業予定地のできるだけ広い範囲に緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかることとなった。また調査および調査に係る事務処理については（株）テレビ松本ケーブルビジョンより委託を受けた松本市、松本市教育委員会が行うこととした。松本市教育委員会では次節に示す発掘調査団を組織して、平成9年5月より現地における調査を実施し、平成10年度に室内における整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 神田訓安、竹原 学

調査員 今村 克、松尾明恵、三村 肇

協力者 浅井信興、浅輪敬二、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、市場茂男、入山正男、上兼昭一、内沢紀代子、内田和子、大月八十喜、岡村行夫、開嶋八重子、上條尚美、上條道代、河上純一、神田栄次、清沢智恵、小松正子、奥 喜義、斉藤政雄、鷲見昇司、高橋登喜雄、竹平悦子、田中一雄、寺嶋 実、中村恵子、中村安雄、林 和子、林 武佐、藤井源吾、藤井道明、布野行雄、布山 洋、洞沢文江、牧 久雄、丸山喜和子、丸山恵子、三宅康司、村山牧枝、斐 國成、百瀬二子、百瀬二子、百瀬義友、横山 清、横山真理、米山禎興

事務局

<平成9年度>

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、
近藤 潔、田多井用章、川上真澄

<平成10年度>

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、
久保田 剛、近藤 潔、上條まゆみ

Ⅱ 遺跡の歴史的環境

兎川寺遺跡の存在する里山辺地区は松本市の東部に位置し、地形的には薄川の扇状地と東山の山麓地形からなっている。この地区には多くの埋蔵文化財が存在しているが、近年のは場整備事業や区画整理事業、住宅建設による発掘調査で次第に遺跡の内容や性格が明らかになってきている。ここでは過去の調査成果をとおして兎川寺遺跡とその周辺、薄川流域に分布する遺跡群について概観してみたい（第1図参照）。

旧石器時代 これまでのところ里山辺地区において遺跡・遺物発見の報告はなされていない。

縄紋時代 扇状地両側の山麓部や扇状部に遺跡の分布がある。薄川右岸では針塚、堀の内、石上、薄町遺跡、また左岸からは南方、林山腰遺跡で前期末～中期初頭の住居址、土坑が検出されている。しかし中期中葉～後葉の集落遺跡は里山辺地区、すなわち薄川扇状地の扇状部ではほとんど分布がなく、したがって調査事例も少ない。後・晩期の遺跡としては林山腰遺跡で後期前葉の柄鏡形敷石住居址が調査され、針塚遺跡で晩期の遺物が採集されている。

弥生時代 薄川沿いの段丘上に前期まで遡る針塚遺跡があり、昭和57年の調査で透瓦川式土器2個体をもたぬ再葬墓群が発見され、鎌田遺跡からもこの時期の遺物が出土している。中期後半の集落址は県町遺跡や横田古屋敷遺跡など、より下流域の低湿地に臨んだ地でその存在が知られ、中でも県町遺跡では38棟の住居址が検出され、この時期の拠点的な集落と考えられる。兎川寺遺跡周辺では後期に至って鎌田、堀の内遺跡など扇状地臨の低湿地縁辺部に集落が営まれるが、扇状部での遺跡の存在はあまり知られていない。

古墳時代 薄川右岸では、弥生時代後期より継続する堀の内遺跡で前・中・後各期の住居址計25棟と前期の方形周溝墓1基が、鎌田遺跡でも中期の住居址が検出され集落の発達を物語るが、6世紀代をもって集落は終焉する。代わって7世紀代に至り扇状部の下原遺跡などで居住が開始され、奈良時代以降まで継続発展していく。左岸の千鹿頭北遺跡は前期以来の集落が継続し、7世紀代に特に発達をみせる。これまでに40棟以上の住居址の他、掘立柱建物址も多数調査されている。

古墳は薄川沿いと扇状地両端の山麓部に分布がある。前者では右岸の薄町から荒町にかけて中期の針塚古墳、後期の大塚古墳、古宮古墳などがある。針塚古墳では竪穴式石槨から内向花文鏡が出土している。左岸には南方古墳、巾上古墳などの後期古墳がある。南方古墳では横穴式石室から金銅装の圭頭太刀、銅鏡・承盤、壺鏡などが出土した。山麓部の後期古墳としては右岸の丸山古墳、左岸の御符古墳などが知られている。これらの古墳の被葬者は山辺地域の集落にその出自が求められるものと推察される。

奈良・平安時代 薄川両岸の扇状地上に広範に集落址が分布し、これまでの調査で検出された遺構が最も多い時期である。左岸では千鹿頭北遺跡で引き続き集落が継続している。右岸では乾燥した扇状部にも遺跡が拡大し、前時期から継続する下原遺跡の他、9世紀代には本遺跡や針塚、新井、薄町、石上、鎌田、堀の内遺跡などの集落址が新たに出現する。しかし10世紀に入るとこれらの集落は途絶えてしまい、10世紀末～11世紀に至って再び集落が形成されるが、住居の分布は散的となる。

なお針塚遺跡は平成3年の調査では9世紀代と11世紀代の住居址計19棟が検出され、時期・地形的に本遺跡との関係が目される。また新井遺跡では平安時代前期の人為的な溝状遺構から須恵器窯の窯体片が出土し、近在に窯業生産関係の遺跡が存在する可能性を強く示唆する。

中世 これまでに堀の内、石上、針塚遺跡で火葬墓、薄町遺跡で土坑が検出され、青磁・白磁などの遺物も得られている。しかし他の時代に比べて調査事例は非常に少なく、古代から中世にどのように集落が継続してゆくのか、今後調査の進展が待たれる時期である。

Ⅲ 調査概要

松本市里山辺地区に所在する兎川寺遺跡は松本市街地の東部に位置し、薄川の扇状地上標高620～640mの西向き緩斜面上に立地する平安時代を主体とする集落遺跡である。現況は水田、葡萄園、宅地などとなり、薄川の現河道から北に約620mの距離にある

今回計画された(株)テレビ松本ケーブルビジョン社屋の建設事業予定地は、兎川寺や松本市教育文化センターで面積にして2,108㎡を測る。対象地内における遺構・遺物の有無とその分布状況についてはこれまでまったく不明であったため、松本市教育委員会では市内遺跡確認事業として事前に対象地内の試掘調査を行い、その結果を受けて再協議の上、社屋建設にともなう事業として兎川寺遺跡の発掘調査を行うことが決定、試掘のデータから調査範囲を選定して平成9年5月に本調査を実施するに至った。

調査は建物の建設予定部分を中心に、用地内の可能な限り広い範囲に実施するよう努めた。したがって排土処理の関係から2度に分けて調査することとなったが、プレハブハウスや駐車用のスペースなどについては調査できなかった。掘り下げ作業は遺構検出面である黄褐色凝土層面まで重機にて表土除去を行ったのち人力で遺構検出・掘り下げ作業を行い、調査終了後再び重機にて埋め戻した。遺構測量は磁北との角度差から求めた真北方向に沿って、任意に3m方眼を設定して行った。

次に調査区の土層構成について触れておく。表土は水田耕作土と床土(第Ⅰ・Ⅱ層)が調査地全体を30cm程度覆う。第Ⅲ層として褐色土がみられるが、層厚は東で薄く10～20cm、西端で厚く30～40cmを測る。第Ⅳ層は黒色土で、20～30cmの厚みがある。縄紋中期後半～平安時代の遺物を包含し、遺構のほとんどは本層中から掘り込まれている。用地の西北部で特に厚く発達、周囲に比べて粘性があり漆黒に近い色調を呈する。第Ⅴ・Ⅵ層は地山層で、第Ⅴ層の暗褐色漸移層は用地西側でのみ発達している。第Ⅵ層は黄褐色の二次堆積ロームで、拳大～時に数10cm大の礫を含む。また場所によってはほとんど粘性がない砂礫層に近い状態となっている。

最後に今回の調査の実施期間、面積、検出遺構、出土遺物について以下に列記しておく。調査成果としては平安時代前期、9世紀後半を中心とした集落址の存在が明らかとなり、良好な住居址資料とその廃絶にかかる行為について多くの知見をえたこと、土器、金属製品など多数の遺物、なかでも多数の墨書土器、緑釉陶器、銅鏡など重要資料がえられたことなどである。

調査期間 平成9年5月30日～7月26日

調査面積 1,260㎡

検出遺構 竪穴住居址 14棟(平安時代前期11・後期3)

掘立柱建物址 5棟(平安時代前期)

柱穴列 3列(平安時代前期)

焼土面 1基(平安時代前期)

土坑 65基(平安時代)

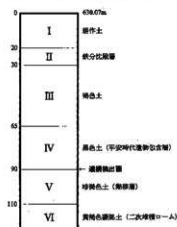
銅鏡埋納遺構 1基(平安時代)

ピット 53基(平安時代)

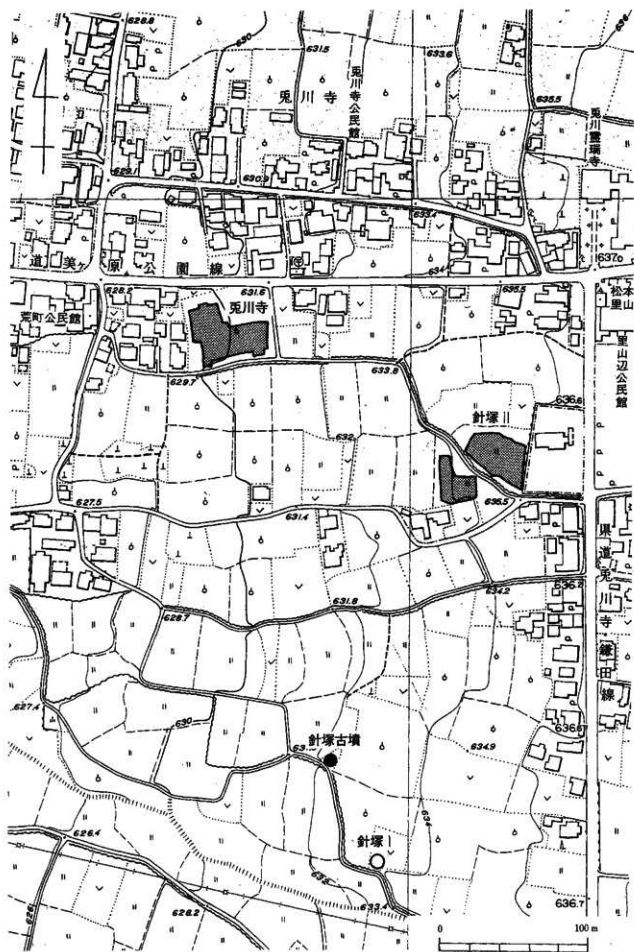
出土遺物 平安時代 土器・陶器(土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器)

鉄器(鏃・刀子・斧他)・銅製品(鏡)

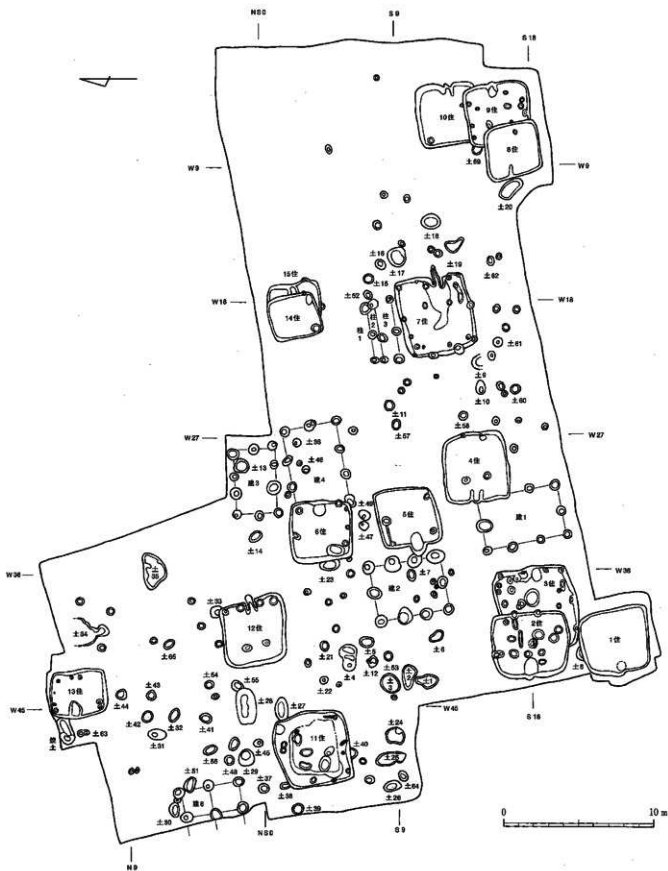
調査区西壁中央(11住西側)



第2図 基本土層



第3図 調査範囲



第4図 遺構配置

Ⅳ 遺構・遺物

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址(第1表、第5～11図)

竪穴住居址は合計で15棟が検出された。各遺構の詳細については一覧表に譲り、ここでは時期ごとの概略を述べておきたい。各住居址の時期比定については出土土器の様相、他遺構との重複関係などから推定した。

住居址の時期的分布は5期～14期にわたり、形態、規模、構造には時期ごとの特徴がみられる。また廃絶時における礎の廃棄やカマドの破壊を窺わせるものもあり、これらをふまえながら概観する。

①5期の住居址

5・6住がこの時期に帰属するが、出土土器からみて6住が先行し、4期まで遡る可能性がある。

覆土の状況 6住では壁沿いを除くほぼ全面の覆土下層に廃棄されたと考えられる礎群が検出された。5住は遺構が浅いため明瞭でないが、一部に礎の集積がみられる。

平面形・規模 2棟ともに方形基調で一辺4m前後・床面積約13㎡と規模を等しくし、近接して南北に並ぶことから建て替えによる移動が考えられる。規模的には当該期の松本平では標準的な中型住居である。

カマド 東壁か西壁の中央に設置される。5住は燃焼部が壁外に張り出す形態だが上部構造はわからない。6住は石組みカマドで、火床面上に不自然な状態で構築石材や土師器甕の大破片がのっており、住居の廃絶にともなって意図的な破壊を受けた可能性が高い。

柱 穴 2棟ともに柱穴をもたない形態である。

その他の屋内施設 5住の一部に周溝状の掘り込みがみられる。6住の南西隅では床面上に巨礫が突き出ており、構築時に周囲を掘り下げて除去しようとした痕跡が残されていた。

遺物の出土状況 カマド火床面上に土師器甕片が廃棄される例(6住)、壁沿いの床面に完形の食器類が置き去られる例(5住)、廃棄された礎群に混じって破片や半完形品が出土する例(6住)がみられる。

②6期の住居址

10・13・15住が本時期に帰属すると考えられる。13・15住は遺物が少ないため時期決定は微妙である。10住は7期の8・9住との重複状況からみて10住→9住→8住の順に連続的に建て替えられた可能性が高い。

覆土の状況 いずれの住居址も断面観察からは典型的な自然埋没の状況は窺われない。カマド周囲から中央部にかけて礎の集中的な廃棄が行われ、覆土も明確な層をなさない。

平面形・規模 方形(10住)ないし長方形(13住)を呈する。規模的にはいずれも中型の住居であるが、10住が一辺4mを若干上回り、他2棟は3m後半台と小ぶりである。

カマド 各住に石組みカマドがみられ、東壁または西壁の中央に設けられる。10・15住では天井部を失うのみではほぼ原形をとどめるが、13住ではほとんどの石材が抜き取られ、火床面上から床面中央部に構築材を含む多量の礎が廃棄される。10・15住でもおそらく廃絶時に天井部の破壊が行われたものと考えられ、火床面上に数個体分の土師器甕片の他、杯などの食器類も廃棄されている。

柱 穴 10・15住は柱穴のない形態である。13住ではカマド側の両隅とカマド対面の中央壁下に各2基つづ円形ピットがあり、掘り込みは浅いものの配置の規則性から柱穴として捉えられる。

遺物の出土状況 良好な出土状況の10住ではカマドの破壊と関連してか焚口やその周囲に配された杯など食

類の一群と、床面中央部の廃棄礫群を囲むようにやや壁寄りの位置に点々と配された杯・椀など食器類や小型甕、鉄器からなる一群が捉えられる。

③7期の住居址

7～9住が本時期に帰属する住居址である。土器様相や重複関係からみて9住がこの段階の前半、7・8住が後半に位置づくものと考えられる。

覆土の状況 遺構の深さにかかわらず覆土の分層は困難で、中・下層に礫の廃棄が行われていることから短期間のうちに埋められたものと考えられる。礫の廃棄は7住が中央部を主体に、8住がカマド手前から住居の中央部にかけて、9住では中央部から北東隅にかけて行われている。

平面形・規模 方形（8・9住）ないし長方形（7住）を呈する。規模的には7住が長辺5mを超え当該期の大規模住居に含まれるが、その中でももっとも小さい部類に属する。3～4m台の8・9住はこの時期に普遍的な中型の住居である。

カマド 東壁か西壁の中央に構築される。6期と同様な石組みカマドであるが、いずれも燃焼部の天井が意図的に壊されているようである。保存状態の良い7住のカマドは袖石の外側に厚く黄褐色粘質土を貼った状況が明瞭に捉えられ、煙道部は蓋石2個が残し側壁に礫を「ハ」字状に配した状況が観察される。火床面は著しく被熱しているが、奥壁は熱を受けた痕跡がなく、煙道もそれほど顕著ではない。火床面の中央にはピットがあり、支脚石の抜き取り穴とみられる。

柱穴 7住は4本主柱の住居で、その配置はカマドと反対側の2本が壁を切り込んで配される形態である。四隅とカマド両側、長辺の中間にも壁を切り込む柱穴があり、軒の高い上屋構造が想定される。8・9住は主柱穴のない形態である。

遺物の出土状況 各遺構とも良好な出土状況を呈している。そのあり方には6期の住居址と同様な傾向が窺え、すなわちカマドの両脇や手前に食器類、時に煮炊具の甕や小型甕が置き去りにされ、カマド内には土器器甕の破片が集積される。さらに住居内に廃棄された礫群の周囲にも杯・椀などの食器類が残される。7住では礫群の上面からも完形に近い食器類が出土した。こうした状況からみる限り、カマドの破壊や礫の廃棄にともないこれらの遺物も置き去られた、あるいは捨てられたものと考えられる。

④8期の住居址

3・12・14住が本時期に帰属する住居址である。

覆土の状況 本期の住居址においても同様な傾向が窺え、例外なく礫の廃棄が行われている。礫の分布状況は3・14住が壁寄りを除く中央部のほぼ全域、12住でもカマド手前から住居中央部にかけてである。

平面形・規模 方形を基調とする。規模的には3住が長辺が5.5mほどあり、7期の7住とともに大規模住居として位置づく。12住は中型でも大きな部類、14住は中型としては小さい部類に含まれる。

カマド 3棟ともに東壁の中央に構築される。いずれもこれまでのものと同様な石組みカマドである。両袖を残す12住以外は石材がすべて抜き取られ、火床面上や焚き口の手前に放棄されている。14住ではカマド内に5個体分以上の土器器甕破片が廃棄され、3住では食器類の破片がみられた。

柱穴 3・12住が主柱穴を有する形態である。3住は他の住居址との重複もあり床面中央部での主柱穴の状況が不鮮明だが、7住と同様な壁柱穴がみられ、ほぼ同様な構造であったものと推察される。12住は7住とは反対に4本主柱のうちカマド寄りの2本がカマド両側の壁に接して配されるものである。

遺物の出土状況 出土位置や内容は前時期と変わらない。3住ではカマドの南脇と廃棄礫群の南縁に沿って食器類が、12・14住ではカマドの両側からやはり食器類が完形で出土している。

⑤11～12期の住居址

本期の住居址は2・4住の2棟が該当する。

覆土の状況 7・8期の住居址における状況とまったく変わらず、単層の覆土と廃棄礫群が観察される。特に4住ではカマド手前から中央部にかけての範囲にのみ礫の集中的な廃棄が行われ、その外形は明瞭な長方形を呈する。

平面形・規模 方形(4住)ないし長方形(2住)を呈するが、8期までのものに比較して隅丸で胴張り気味の形態である。規模的には中型住居の大きな部類から大型住居の小さい部類に位置づけるものである。

カマド 西壁か東壁の中央に石組みカマドが設けられる。2住では石材がすべて抜き取られ、火床面上に積みおかれていた。4住では天井部以外が良好に残存し、火床面上に完形の土器器杯や羽釜の大破片が残されていた。

柱穴 2棟とも4本の主柱を有するもので、カマドと反対側の2本が壁を切り込んで設けられる配置である。またカマド手前から主柱穴に囲まれた住居中央部が非常に堅固なタタキ床となる反面、その外側では軟弱で、その差が明瞭である。

その他の屋内施設 2住の床面中央には主軸方向に並走する間仕切り溝的な2条の掘り込みがみられる。

遺物の出土状況 カマドの脇に遺物が置き去られる傾向が窺え、4住では数点の食器類や鉄斧、2住ではほぼ完形の羽釜が出土している。その他4住では礫群の周囲に土器・陶器類の廃棄があり、2住では逆に礫群に混じって食器類の出土がみられた。

⑥14期の住居址

本期に帰属する住居址は11住1棟のみである。

覆土の状況 他時期の住居址と同様、上層から下層まで単一の土層構成で、カマド寄りの床面上に礫の集中廃棄がみられる。そのあり方は4住と同様で、礫群の範囲が明瞭に捉えられるものである。

平面形・規模 隅丸でやや胴張り気味の方角を呈し、一辺が5mをやや上回る規模はこの時期の中型住居の中では大きい部類に属する。本住居は中央部と周囲で床面が段差をなし、中央部が一段低くかつ非常に硬く叩き締められている点で他時期の住居と異なっている。壁寄りの床面は総じて軟弱である。

カマド 北壁の隅に設けられる点で他時期のものとは異なる。石材は廃絶時に抜き取られており、袖の骨材と思われる礫が火床面上に横たえられている。また支脚石のみ原位置に残されている。

柱穴 中央部床面のピットから4本主柱を想定したが1基みあたらず判然としない。

その他の屋内施設 2住の床面中央には主軸方向に並走する間仕切り溝的な2条の掘り込みがみられる。

遺物の出土状況 カマドの手前から脇に整然と置き去られた完形の食器類や羽釜など一群、礫群の西側に壁に沿って散在する食器類からなる一群が捉えられる。礫群の中からは完形品はえられていない。

⑦その他の住居址

遺物の出土が非常に少なく、特にまとまった一括資料がまったくないため時期比定が困難な住居址として1住があるが、本址は遺物の出土が極端に少ない点に加え、住居内に廃棄された礫群のあり方が非常に特徴的である。住居内の特定範囲に礫を廃棄する点では4住などと同様であるが、カマドの袖や天井を徹底的に取り去ったのち火床面上に小礫を積み上げ、さらにやや大きめの礫で覆っている状況、カマド左脇から中央部にかけての床面のみ隙間なく大きさのそろった小礫を集積させるあり方からはカマドや床面を封じる明確な意図が読み取られる。食器類などの遺物をまったく残さない点も、他の住居址とは異なった廃棄時の行為やその背景を示しているものと考えられる。

(2) 掘立柱建物址・柱穴列 (第2表、第12・13図)

掘立柱建物址は合計5棟が検出された。このうち建3については柱配置がばらつき規模や柱穴の深さなど疑問も残り、建物として成り立たない可能性もある。

柱穴配置の明確な4棟のうち、建1・2・4の3棟は側柱式建物、建6のみ総柱式建物である。3棟の側柱式建物址は3間×2間構成の長方形をなし面積は17～20㎡ほどである。松本平の古代においてももっとも普遍的な形態・規模であり、時期的には2期～8期にみられるものである。総柱式建物の建6も方形建物と仮定するならば2期～8期にみられる普遍的な規模のものとなる。建物址の時期的な指標となる遺物はわずかに建6から黒色土器Aの杯・碗類がえられたのみで、須恵器の杯類がみられないことと墨書土器が目立つことを積極評価するならば7期前後の住居址にともなう可能性が考えられる。また他遺構との重複関係からみると6住に切られる建4に5期かそれ以前の時期が与えられ、4住に切られる建1が11期かそれ以前であることが明らかである。このことから、今回検出された掘立柱建物址は5期～8期の住居址にともなう構築されたものと考えるのが妥当であろう。

柱穴列は7住の北壁と平行に3列が重複して検出され、おそらく7住にともなう設けられた柵などの施設と考えられる。3列ともほぼ同位置にあり、建て替えによる重複と考えられよう。

(3) 焼土面 (第13図)

13住北西隅の覆土上面から西側にかけて、東西188cm・南北92cmの範囲に焼土面がみられた。被熱の度合いは西側で特に顕著で、検出面からの焼土の厚さは15cmほどを測る。遺物がないため帰属時期は不明だが、13住より以後の産物であり、したがって6期かそれ以降の遺構とならう。

(4) 土坑 (第13～15図)

65基が検出された。分布の中心は2住から13住の間にあり、他に7住周辺にも数基が分布している。形態的には円形ないし楕円形のもので大半で、大型のものには形態の整わないものも多い。また覆土中に礫が多く含まれるものが14基ほど確認される。出土遺物はきわめて少なく、土坑28から7～8期に帰属する軟質須恵器杯の大破片がえられた程度である。あくまで推定だが、大半の土坑が住居址と同様平安時代に帰属するものと考えておきたい。

(5) 銅鏡埋納遺構 (第13図)

12住の北東、土坑28の掘り下げ中に検出面より10cmほど低い位置で小型円形の銅鏡が背面を上にして水平に近い角度で出土した。鏡の周囲、直径11cmほどの円形の範囲は黒土が分布し、ピットがあることが確認された。断ち割り精査の結果、ピットは鏡上面より12cm、土坑の検出面より22cmの深さがあり、掘り込みの中位に鏡が存していたことが判明した。おそらく円筒形の木製容器などに入れて、何らかの目的をもって埋納されたものと考えられるが、その帰属時期を示す伴出遺物はえられなかった。本址が切り込んでいる土坑28は7～8期の遺構であるので、それ以降のものとならう。近接して8期の12住や13～14期の11住があり、特に後者との関係を考えたいが決定根拠に欠ける。

(6) ピット (第4図)

概ね直径50cm程度かそれ以下の、円形の穴をピットとした。53基が検出され、その分布状況は土坑と重なり、7住周辺や2住から13住の間の一帯にみられる。出土遺物がほとんどなく帰属時期は不明だが、分布の重なる土坑と同様、大半は平安時代に帰属するのであろう。

第1表 竪穴住居址一覧

規模はすべてcm単位、面積は㎡である。()は推定値、<>は残存箇所、帯きは検出面からの最大値を示す。

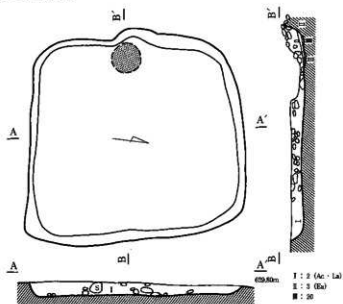
住居址番号	位置	平面形状 主軸方位	規模 長さ 幅 深	カマド 床面積 主柱穴	遺構・所見	時期
1	南西隅	方形	長 460 短 452 深 -30	石 組 西壁中央	北側で土を切る。北東隅で3件をわずかに切る。 隅丸・割張り気味の形態である。黄褐色硬質土層中に埋り込まれ、床面は粘質土を薄く貼る。カマドは住居廃棄時に完全に袖・天井を除去されており、その後5-25cm大の礫を火床面上に積み上げ、密封している。さらにカマド南側の西壁下から床面中央部の間に同様な礫の集積が行われているが、北壁一東壁寄りにはまったく行われていない。	8 12 期
		N-100°W	15.8	—	遺物は北東部の覆土中から土師器や黒色土器の杯・椀類の底部破片が3点ほど出土した他は非常に少なく、床面やカマド内に意図的に置かれたり埋められたものは皆無である。貯蔵穴などの内部施設、柱穴はみられない。	
2	南西隅	長方形	530 444 -30	石 組 西壁中央	9柱を切り、本柱が埋く構築される。 隅丸・割張り気味の形態である。黄褐色硬質土層中に埋り込まれ、カマド・中央部の床面には非常に堅固な粘床を施す。覆土は単層でカマド手前・東壁下に散在的に礫がみられた。カマドは袖・天井のほとんどが破壊され、石材の一部は火床面上に置きなりにされていた。主柱穴は4基(P1・2・11・12)で、カマド手前の床面上に2基、東壁に切り込んで2基が配される。床面中央には主軸と平行に2条の埋り込み溝状の痕跡がみられる。	11 12 期
		N-92°W	18.0	4基	遺物はカマド南脇から手前にかけて土師器杯・羽釜、灰輪陶器類が遺存していた他、南東部と中央やや北東寄りの下層一床面にまとまりがあり、土師器小壺型、黒色土器杯、灰輪陶器類・瓦類が残されていた。また貼床除去時に検出されたP3内からは土師器碗が出た。	
3	南西隅	方形	548 536 -34	石 組 東壁中央	1住に南壁を、2住に西壁を切られる。 黄褐色硬質土層中に埋り込まれ、全体に粘床を施すが軟弱。覆土は単層で全体の礫に礫が散在する。カマドは袖・天井が破壊を受け、火床面に石材や土師器小壺型、黒色土器杯・鉢の破片が埋め込まれる。柱穴は壁下に配列する浅いP2-6・13などが該当するがいずれも支柱穴と考えられる。主柱穴は判別としない。	8 期
		N-85°E (24.0)	?	遺物はカマドの南脇から土師器杯・小壺型、黒色土器杯・椀・鉄鉾が、南壁寄りから黒色土器杯、軟質須恵器杯、灰輪陶器耳皿、刀筥と思われる鉄製品がそれぞれまとまって出土した。その他中央部から北寄りの覆土中にも土師器・陶器類の大破片が散在的にみられた。		
4	中央西	方形	472 440 -40	石 組 西壁中央	壁1の北東部を切る。 黄褐色硬質土層中に埋り込まれ、中央部で非常に堅固な粘床を施す。覆土は単層で、カマド前・中央部にかけての下層、南北290cm・東西240cmの方形の範囲に10-40cm大の礫が集積される。住居廃棄時の行為であろう。カマドは天井を失うが、両袖・支脚石・火床面にも良好である。火床面上には完全に土師器杯や羽釜の破片が残される。主柱穴は4基(P1-4)で、カマド手前の床面上に2基、東壁に切り込んで2基が配される。東壁下のP4は連山層中の大礫に埋り込みが阻まれ浅くなっている。	11 12 期
		N-90°W	16.3	4基	遺物はカマド北脇から土師器杯、灰輪陶器類・皿・鉄鉾が置かれたかのような状態で出土、南寄りの覆土中にも土師器羽釜や灰輪陶器類の破片が散っていた。	
5	中央西	方形	408 396 -12	築出 西壁中央	カマド部分で壁2と切り合がる、新旧関係は明確に把握できなかった。 黄褐色土層中に埋り込まれ床面は硬く粘床を施すが、他の住居址に比べ非常に浅い。覆土は単層で中央部に礫の集積がみられる。カマドは火床面が壁外に大きく張り出す形態で、袖は失われている。壁2からピット4基と一部で加溝が検出されたが、柱穴はみられない。	5 期
		N-101°W	13.3	—	遺物は少ないが、床面のほぼ中央から刀子の破片が、南壁下と東壁下からほぼ方形の須恵器杯がそれぞれ出土した。	
6	中央西	方形	416 414 -36	石 組 東壁中央	西壁で土3、東壁で壁4を切る。 黄褐色土層中に構築され、中央部の床面は硬く粘床を施している。覆土は土層でより黒い色調を呈する。下層にはほぼ全面に礫の集積が認められる。カマドは袖・天井を破壊され、石材の一部が2個体分の土師器破片とともに火床面上に残される。壁沿いからは埋り込み溝状の痕跡が検出されたが、柱穴はみられない。西壁下に地山中に存した巨礫を除去しようとする痕跡が、断念しそのまま放置した痕跡がみられる(P1)。	4 5 期
		N-90°E	13.2	—	遺物は南西部から覆土中の礫に混じって須恵器杯・壺・土師器小壺型などの破片が出土した。	
7	中央東	長方形	536 496 -68	石 組 東壁中央	今回調査した住居址の中で最も11住とともに最大規模である。黄褐色硬質土層中に深く埋り込まれる。覆土は60cm前後と厚いが、ほとんど単層である。中・下層のほぼ全面に多量の小・中・大礫が埋め込まれ、礫間には土器・陶器などの遺物も多い。床面は非常に硬く締められ、カマド前から中央奥にかけて面的に低くなる。カマドは掛穴付近の天井を除き完存に近い状態である。支脚石は抜き取られ、火床面上には土師器類、須恵器類の破片が残される。主柱穴は4基あり(P1・2・9・10)、その配置は2・4住と同様である。また南北壁下とカマド両脇には支柱穴が設けられている(P3-8・11・13)。	7 期
		N-83°E	20.2	4基	遺物は覆土中から床面にかけて黒色土器の杯類を主体に完形に近い状態の黒色土器・須恵器・軟質須恵器・灰輪陶器が多量に出土し、それらの分布は大きくカマド北脇、南東隅・南壁中央下、中央部から北西寄り、南寄り西壁下にまとまる。特殊遺物としては多量に出土した黒土器土器、カマド北脇の一帯からえられた緑輪陶器類、南西寄りの床面から出土した鉄製品などがある。	
8	南東隅	方形	368 352 -24	石 組 西壁中央	9柱を切るが本柱がわずかに浅く、床を貼っている。 黄褐色硬質土層中に構築され、隅丸の形態をなす。覆土は単層で、住居廃棄時にカマド前から中央にかけての床面上に10-30cm大の礫が220×180cmの範囲に集積される。床面は9柱をわずかに低く、堅固で薄く粘床がなされる。カマドは天井と左側袖を失う。火床面上には土師器類、黒色土器類の破片が残される。柱穴・貯蔵穴などはみられない。	7 期
		N-99°W	10.6	—	遺物はカマド周辺と南壁下から完形に近い土器が出土、特にカマド南脇には縦長の土師器壺と4個体の黒色土器杯・椀が残されていた。特殊な遺物として黒土器7点が出土している。	

住 号	位 置	平面形 主軸方位	規 模 床面積	カマド 主柱穴	遺 跡 所 見	時 期
9	市東區	方形	432 420 -28	石 組 東壁中央	北壁で土9、10住を切る。8住に西壁を切られる。10住とは床面がほぼ同一レベルである。黄褐色 障壁土層中に掘り込まれ、堅固な床面をなす。覆土は壁際から中央部に向かい暗い色調となる。カ マド前から北半部には多量の礫が充填される。カマドは袖の基部部と火床面が残存する。床面から は円形ピットが11基検出されているが、確実に柱穴と断定できるものはない。遺物は西寄りの床面 上から黒色土器杯・碗、小型甕などの完形品が状況で出土した。覆土内の礫群の周囲から土器類 が破片でえられている。	7 期
		N-80°-E	14.3	?		
10	市東區	方形	420 400 -36	石 組 東壁中央	9住に西壁を切られる。 黄褐色障壁土層中に掘り込まれ、隅丸の形態をなす。覆土は上層で暗い色調となり、中央部の下層 に礫の集中層がみられる。カマドは火土層を失うが以下は良好である。柱穴はみられない。遺 物はカマド内から土師器壺・小型甕、黒色土器杯、須恵器壺が、カマド手前の床面上から黒色土器 杯4個体が、北壁から西壁に沿った床面より斧・釘の鉄製品2点と土師器壺・小型甕、黒色土器杯な ど7個体が完形かそれに近い状態で出土した。	6 期
		N-83°-E	12.8	—		
11	北 西	方形	510 508 -40	石 組 北壁東端	土27・38・40を切る。 黄褐色障壁土層中に構築され、隅丸・脚張りの形態をなす。覆土は黒褐色土の単層で、北寄り外の 床面上180×120cmの範囲に礫が集中的に産棄されている。床面は中央部で非常に硬く、80cm内の 幅で壁際がテラス状に一段高くなっている。カマドは産棄時に支脚石を除く袖などの石材全体が 抜き取られ、石材が火床面上に横たえられている。周囲には土師器壺、黒色土器杯、灰釉陶器皿 など6個体が整然と並び、土師器羽釜1個体分の破片も伴出した。ピットのうちP1・2・4・9・13 などが柱穴の可能性があると推定するには整わない。 遺物はカマド以外では西半部の覆土下層から床面に集中し、土師器杯・皿、黒色土器碗、灰釉陶器 碗、鉄線などのまとまった資料がえられている。	14 期
		N-14°-W	20.4	?		
12	北 西	方形	448 420 -40	石 組 東壁中央	隅丸でやや重んじら形態をなす。小礫の多い黄褐色土層中に掘り込まれ、陥没も軟弱である。覆土は 単層で、カマドのある西半部には大礫の集中投棄が行われる。カマドは天井を除き良好な北側壁と南 東隅に円形ピットがある。 遺物はカマドの周囲から土師器壺、黒色土器杯・碗などの完形に近い遺物がえられている。	8 期
		N-80°-E	15	4基		
13	北 西	長方形	380 328 -28	石 組 西壁中央	焼土面に切られる。 黄褐色土層中に掘り込まれ、堅固な床面をなす。覆土は下層に焼土塊や黄褐色土塊を多く含む層がみ られる。カマドから中央部にかけては大小の礫が産棄される。カマドは袖基部部の礫と火床面のみ 残る。壁沿いには円形ピットがあるが、その配列には規則性も窺え、支柱などに使われたものと考え られる。遺物は非常に少なく、礫に伴って出土した黒色土器杯の他は小破片のみである。	6 期
		N-90°-W	9.2	—		
14	中 央 東	方形	346 302 -29 300	石 組 東壁中央	15住の大半を切り、本柱が深く構築される。 黄褐色障壁土層中に掘り込まれ、床面は黄褐色土を貼るが軟弱で判然としにくい。覆土は単層で、壁際を 除くほぼ全面に多量の礫が産棄される。カマドは袖・天井とともに原形をどめず、火床面上には土 師器甕類の破片が残される。南西および南東隅からは浅いピットが検出されたが、柱穴はみあた らない。遺物はカマド内には5個体分の土師器壺の破片が礫とともに産棄され、カマドの両側から灰 釉陶器皿、軟質須恵器杯が出土した。	8 期
		N-78°-E	350 -28	—		
15	中 央 東	方形	365 — -32	石 組 東壁中央	14住に大半を切られ、南側でピットを切る。 黄褐色障壁土層中に構築される。床面は軟弱な陥没床である。カマドは火床と火床面が残存し、内部には 土師器壺類の破片がみられた。カマドの脇から浅い円形ピットが検出された。 遺物はカマド内から土師器壺の破片が、南壁下から須恵器杯・杯蓋、カマド北端から須恵器杯蓋が 出土している。	5 1 6 期
		N-87°-E	?	—		

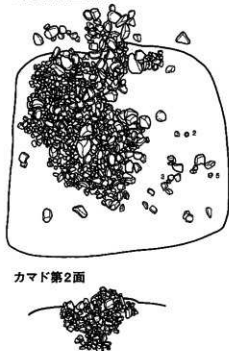
第2表 掘立柱建物址・柱穴一覧

住 号	位 置	平面形 柱配り	主軸方位 審判的	規 模 Gm	柱間寸法 (cm)	柱 穴			備 考	
						平面形	規模(cm)	柱数		
1	中 西	長方形 側柱式	N-12°-W (18.9)	3間×2間 552×344	桁行 梁間	175～182(184) 156～184(172)	円 形	径 44～96	—	4住に切られる。
								深 12～28		
2	中 西	長方形 側柱式	N-10°-W 17.3	3間×2間 472×364	桁行 梁間	140～164(118) 180～196(182)	円 形	径 68～130	—	5住と切り合いが新旧関係は不明。
								深 20～42		
3	中 北	長方形 側柱式	N-6°-W 11.8	3間×2間 432×274	桁行 梁間	104～146(144) 125～160(137)	円 形	径 32～100	—	
								深 6～24		
4	中 北	長方形 側柱式	N-10°-W (20.4)	3間×2間 552×360	桁行 梁間	176～190(138) 170～184(180)	円 形	径 56～80	—	6住に切られる。
								深 16～40		
6	西 北	(方形) 礎柱式	N-11°-W ?	2間×7間 392×?	桁行 梁間	195～220(196) 174～180(176)	円 形	径 64～88	—	調査区外にかかると、土51、ピットを切る。 P1から黒色土器の杯・鉢の破片が出土。
								深 18～76		
柱1	中 東	N-82°-E	2間	352	174・178(176)		円 形	径 58～80	—	柱2と切り合う。 7住の付属的な施設か。
								深 15～27		
柱2	中 東	N-61°-E	2間	366	140・226(183)		円 形	径 54～66	—	柱1と切り合う。 7住の付属的な施設か。
								深 10～30		
柱3	中 東	N-60°-E	2間	410	194・216(205)		円 形	径 47～70	—	7住の付属的な施設か。
								深 10～15		

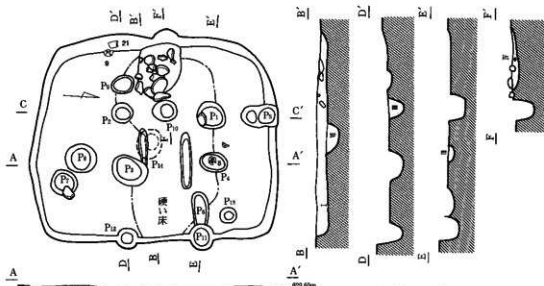
第1号住居址



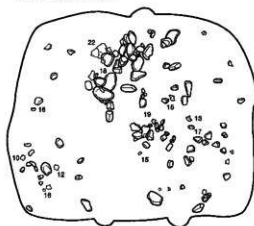
1号遺物出土状況



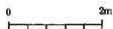
第2号住居址



2号遺物出土状況

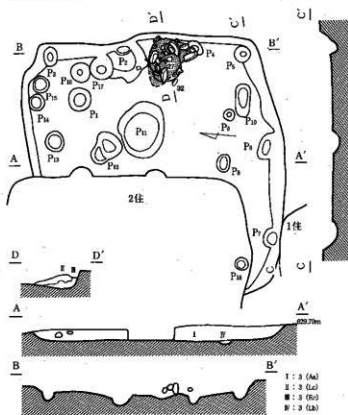


- I : 2 (Aa - Ba - Ha)
- II : 3 (Aa)
- III : 2 (Aa)
- IV : 2 (Aa - Ca)
- V : 3 (Aa)
- VI : 2 (Aa)
- VII : 2 (Ab - Ib)



第5図 検出遺構 (1)

第3号住居址

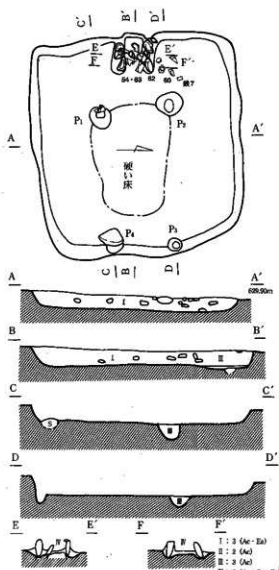


1 : 3 (Ac)
 2 : 3 (Ac)
 3 : 3 (Ac)
 4 : 3 (La)

3住遺物出土状況

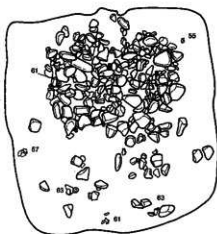


第4号住居址



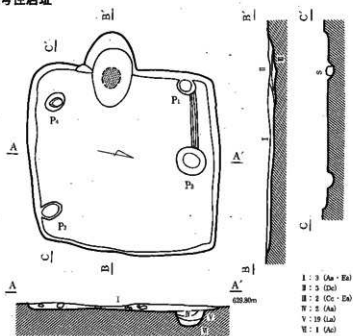
1 : 3 (Ac-Ba)
 2 : 3 (Ac)
 3 : 3 (Ac)
 4 : 3 (Ac-Ce-Ba)

4住遺物出土状況

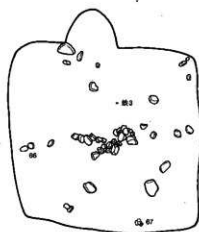


第6図 検出遺構(2)

第5号住居址

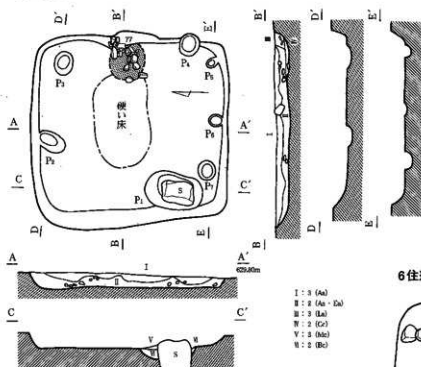


5住遺物出土状況

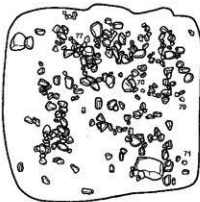


- I : 3 (Aa - Ea)
- II : 3 (Da)
- III : 2 (Ca - Ea)
- IV : 2 (Aa)
- V : 19 (La)
- VI : 1 (Aa)

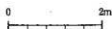
第6号住居址



6住遺物出土状況

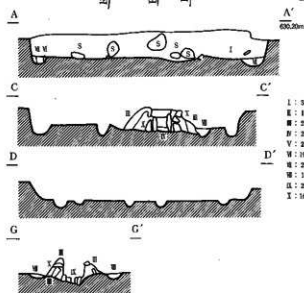
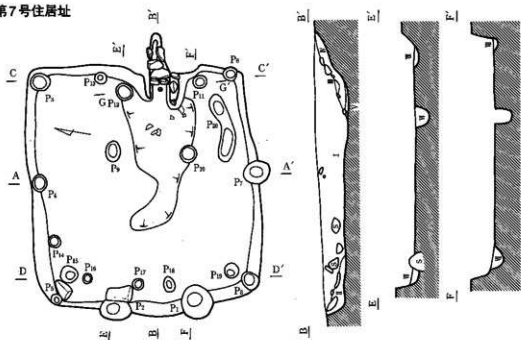


- I : 3 (Aa)
- II : 2 (Aa - Da)
- III : 3 (La)
- IV : 2 (Ga)
- V : 3 (Ma)
- VI : 2 (Ba)

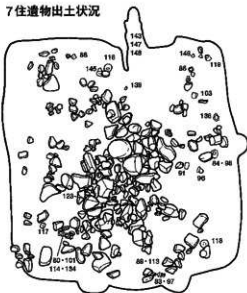


第7図 検出遺構 (3)

第7号住居址

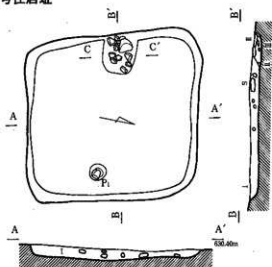


7住遺物出土状況

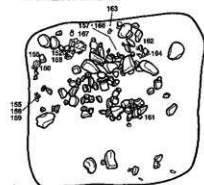


- I : 3 (Ca - Ha)
- E : 1 (Sh)
- M : 2 (Lc)
- N : 2 (Sa - La)
- V : 2 (Cc - Sc)
- W : 10
- X : 2 (An - La)
- Y : 1 (Lc)
- Z : 2 (Cc - Sc)
- Σ : 36

第8号住居址

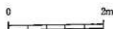


8住遺物出土状況

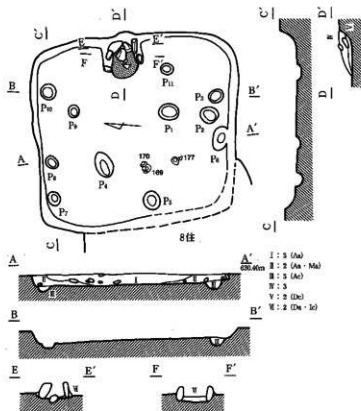


- I : 3 (Ca - Ha)
- E : 2 (Ca)
- M : 2 (Lc)
- Σ : 7

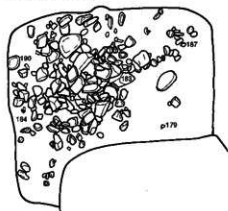
第8図 検出遺構 (4)



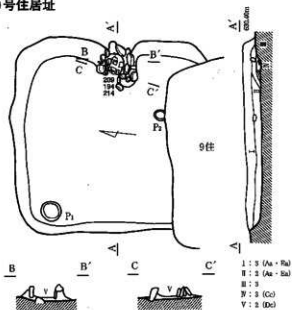
第9号住居址



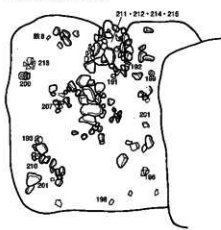
9住遺物出土状況



第10号住居址

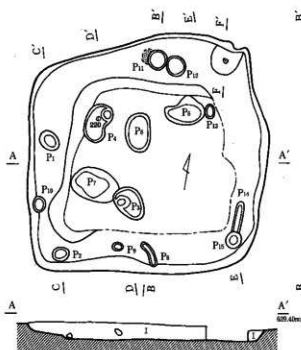


10住遺物出土状況

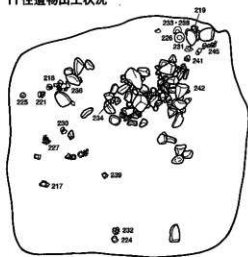


第9図 検出遺構 (5)

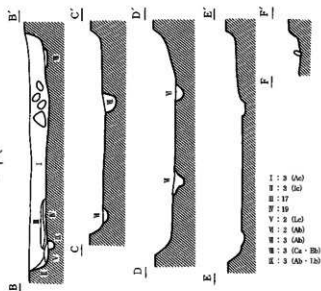
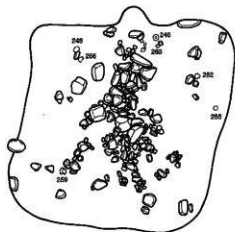
第11号住居址



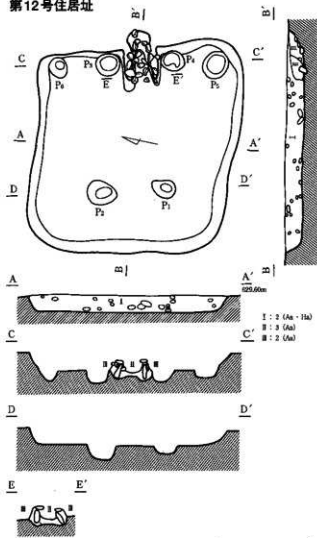
11住遺物出土状況



12住遺物出土状況

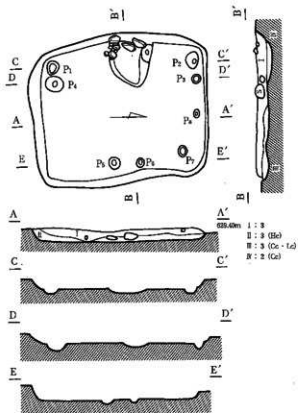


第12号住居址

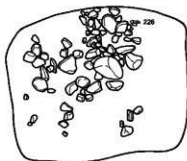


第10图 検出遺構 (6)

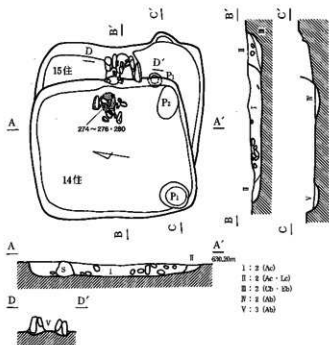
第13号住居址



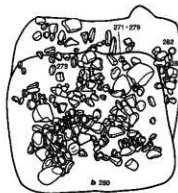
13住遺物出土状況



第14・15号住居址

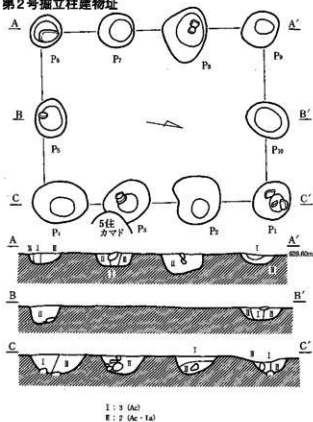


14・15住遺物出土状況

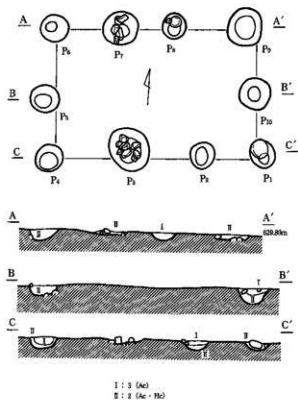


第11図 検出遺構 (7)

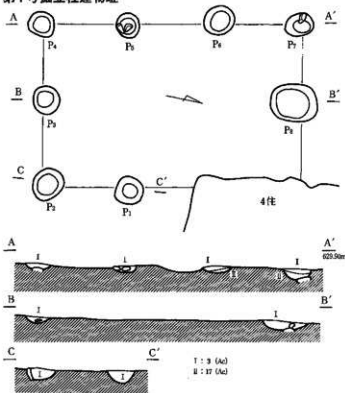
第2号掘立柱建物址



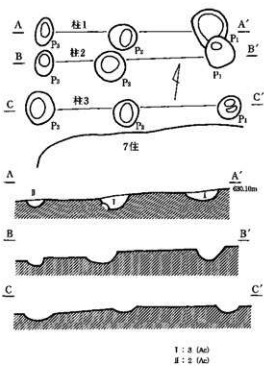
第3号掘立柱建物址



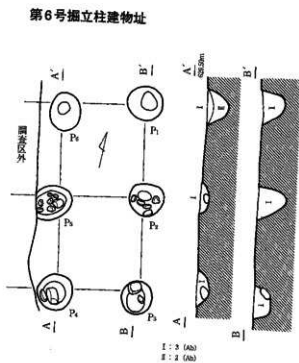
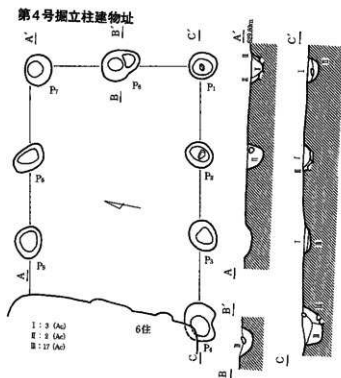
第1号掘立柱建物址



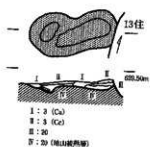
第1・2・3号柱穴列



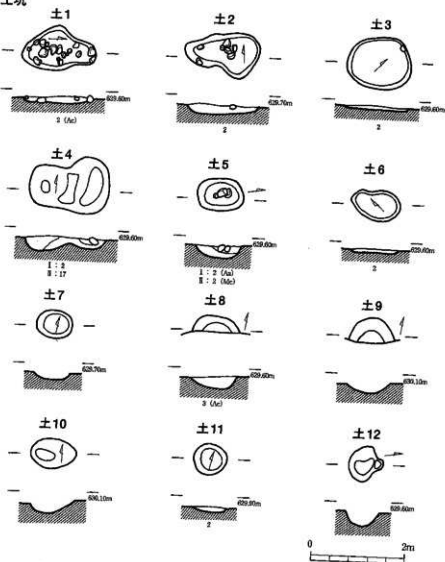
第12图 検出遺構 (8)



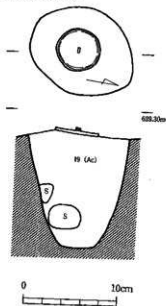
烧土面



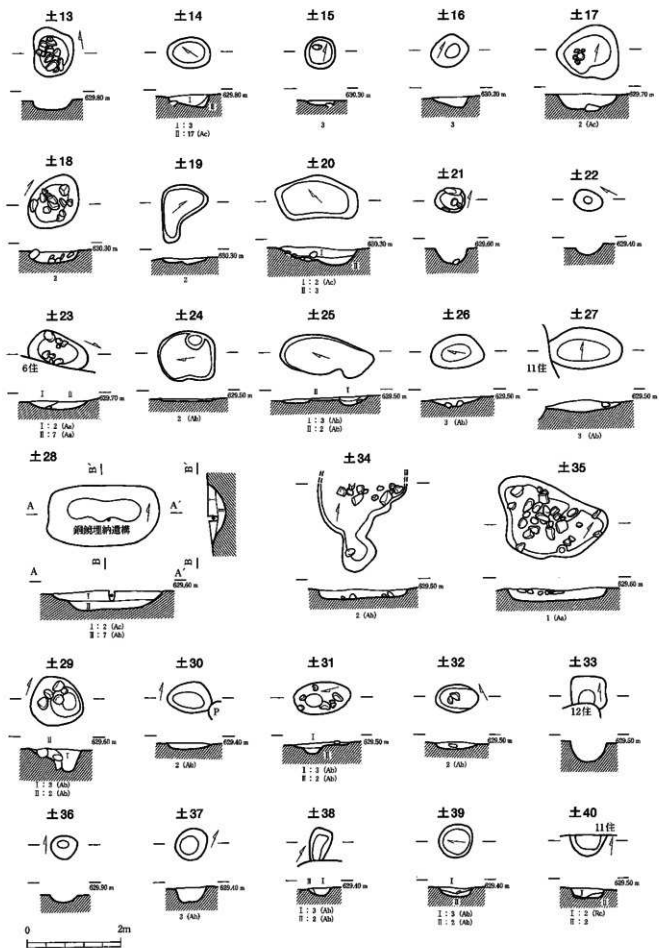
土坑



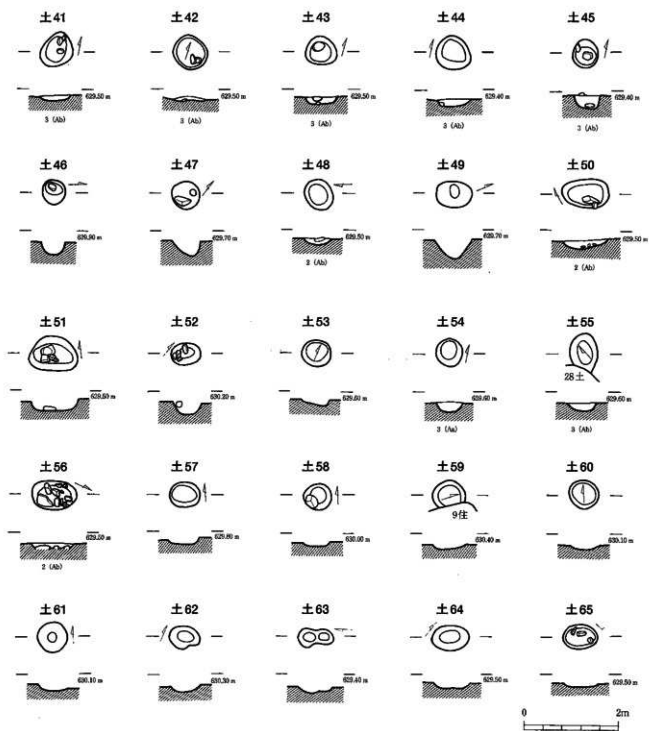
铜器埋纳遗構



第13图 檢出遺構 (9)



第14图 検出遺構 (10)



第15图 検出遺構 (11)

2. 出土遺物

(1) 土器・陶器 (第3・4表、第16～26図)

今回の調査で出土した土器・陶器類は主に竪穴住居址からの出土品で、整理・復原作業により実測が行えた個体は合計で307点に達する。年代的にはすべて平安時代に帰属するものである。

松本平における当該期の土器の編年研究は、主に奈良井川西岸地域において松本市教育委員会が行ったほ場整備事業にかかる発掘調査や(財)長野県埋蔵文化財センターによる長野自動車道建設にともなう発掘調査の膨大な成果から飛躍的に進展し、後者による報告書刊行をもってほぼ完成の域に達した。資料的に希薄な10世紀代や細部の様相など検討の余地も残されるが、ここでは(財)長野県埋蔵文化財センターによる土器編年に基づいて出土土器を概観してみる。なお記述中の器種・器形の名称や時期区分、基本的な編年観についてもすべてそれ(例言7に文献名を示した)に拠っていることを断っておく。

① 種別・器形

第16図に種別・器形の一覧を示し、第3表には遺構ごとの実測個体数について、種別・器形ごとに集計してある。さらに第4表として個々の実測個体の観察表を掲載した。

まず土器・陶器類の種別について。兎川寺遺跡における今回の調査では、土師器、黒色土器A、黒色土器B、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がみられる。このうちもっとも多いのは黒色土器Aの142点で、逆に少ないのは緑釉陶器の2点である。

次に種別ごとに、食器、煮炊き具、貯蔵具としてどのような細別器形が存在するのかをみとめる。

土師器 食器として杯A、椀、皿A、皿(無白)、盤Bがある。

煮炊き具には甕B、小型甕B、小型甕D、羽釜A、甔B、甔Dがある。

貯蔵具は存在せず、その他の道具として円筒形土器がある。

黒色土器A 食器に杯A、椀、皿B、皿(無白)、鉢Aがある。

煮炊き具と貯蔵具は存在しない。

黒色土器B 食器として椀がある。

煮炊き具は存在せず、貯蔵具もみられない。

須恵器 食器は杯A、杯B、蓋B、皿がみられる。

貯蔵具には長頸壺A、短頸壺C、甕Aなどがある。

煮炊き具はみられない。

軟質須恵器 食器として杯Aが存在する。

灰釉陶器 食器として椀、段皿、皿、耳皿がある。

貯蔵具として長頸壺ある。

煮炊き具は存在しない。

緑釉陶器 食器として皿が存在する(137)。

細片のため図化できなかったが、貯蔵具として手付瓶がある(図版参照)。

いずれもA類に分類される特徴を有する。

以上に掲げた器形のほとんどは例言7の文献での分類基準を満たすものであるが、一部にその時点ではあまり認識されていなかった器形が存在する。

まず土師器、黒色土器で皿（無台）としたもので、体部の基本的な形態は皿Bとまったく同一だが、底部が回転糸切り未調整のままで、高台が付加されないものである。その出現頻度は非常に低く、2例が出土したのみである（123・246）。次に須恵器の皿（38）であるが、これは杯蓋Bから天井部の回転ヘラケズリとつまみの貼付を省略したような形態で、底部は回転糸切り未調整で平底を呈する。内部が著しく磨耗しており、視として使われた可能性がある。

その他付け加えておく点として、灰釉陶器の耳皿は底部の破片が1点あるのみで（49）、全形の窺い知れるものはない。同様に土師器小型甕B・甕B・円筒形土器、須恵器甕A、灰釉陶器長頸壺、緑釉陶器手付瓶も器形全体が判明するものはみられない。

②住居址出土土器群の様相とその時期

次に各遺構出土土器のうち、量的にまとまっている住居址出土土器群について、各器形における形態・技法上の特徴と、それらの組み合わせから様相を捉え、編年上の位置を確認してみたい。

1 住出土土器群（1～6） 8点を図化した。食器に土師器杯A・碗、黒色土器A杯A・碗が、煮炊き具として土師器羽釜Aまたは甕D、貯蔵具として須恵器長頸壺Aがある。いずれも覆土中からの破片資料で、まとまった出土状態を示すものではない。内容的にも8期～12期頃のものまでばらつきがあるため明確な時期比定は控える。

2 住出土土器群（7～22） 18点を図化した。食器に土師器杯A・碗、黒色土器A杯A・碗、灰釉陶器杯・段皿・皿、煮炊き具に羽釜Aまたは甕Dがあり、これらの多くはまとまった状態で出土している。

本土器群の特徴はまず全体に占める食器の割合が高く、さらに食器に占める灰釉陶器の量が多いこと、土師器杯Aに口径約10cm、器高が3cmを下回る矮小なものがあること（7）、煮炊き具に土師器甕Bがなく、羽釜Aまたは甕Dの存在が顕著なこと、灰釉陶器のほとんどが漬け掛け施釉で、碗（13・16）の底部に明瞭な回転糸切り痕が残されること、しかし段皿はまだ口径が大きく、段が明瞭で外反も強いこと（18）、碗に深碗がみられないことが指摘できる。

このような特徴からみて本土器群は11期、下っても12期の様相から逸脱しないものと考えられる。ただし、組成中にみられる、黒色土器A杯A（10）と薄手で刷毛塗り施釉の灰釉陶器碗（14）については時期的に符合せず、出土した位置・状況からみて重複する3住に帰属すべきものであろう。

3 住出土土器群（23～53） 35点を図化した。食器には土師器杯A、黒色土器A杯A・碗・鉢A、須恵器皿、軟質須恵器杯A、灰釉陶器碗・段皿・耳皿がある。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Dがみられる。貯蔵具には須恵器長頸壺Aがあり、他に土師器円筒形土器が存在する。これらはまとまった状態で床面から覆土下層に廃棄されたものである。

土器群の特徴を抽出すると食器の主体を黒色土器Aが占め、須恵器はともなわない、他に土師器杯Aと軟質須恵器杯Aが少数ともなう、薄手・刷毛塗り施釉・三日月高台の灰釉陶器碗が伴出する、土師器小型甕Dのカキメ調整が省略傾向にあるなどの点が挙げられる。

これらのことから、本址出土土器群は典型的な8期の様相を示しているものといえよう。

4 住出土土器群（54～64） 11点を図化した。食器には土師器杯A、黒色土器A碗、黒色土器B碗、灰釉陶器碗・皿がある。煮炊き具は土師器羽釜A・羽釜Aまたは甕Dがみられる。これらは量的には少ないが、まとまった状態でカマド内や床面、覆土下層から出土したものである。

土器群の特徴は次のとおりである。食器の主体が土師器杯Aと灰釉陶器が占め、須恵器や黒色土器の杯・皿はまったくともなわない。土師器杯Aには口径10cm・器高3cmの矮小なもの（54）と口径12cm以上・器高4cm以上のやや大きいもの（56）とがある。他に黒色土器B碗がともなう、灰釉陶器の碗は漬け掛け施釉だ

が、深碗はみられない。灰釉陶器皿には回転糸切り痕が明瞭に残される。煮炊き具に土師器甕Bがまったくみられず、羽釜や甗が主体である。

以上の特徴から土器群は2住と同様、11～12期頃の様相を示しているものと考えられる。

5住出土土器群 (65～69) 5点を図化した。食器には黒色土器A杯A、須恵器杯Aがある。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Bがみられる。量的には非常に少ない。

土器群の特徴を抽出すると食器の主体は須恵器が占めているようである。須恵器杯Aは底径が大きく外傾指数は100を超えない。土師器甕Bは薄手で口縁部の外反が強いが、内面のカキメはみられない。土師器小型甕Bがともなう。

量には少ないものの、これらのことからみて概ね5期頃の様相を示しているものと考えられる。

6住出土土器群 (70～78) 9点を図化した。食器には須恵器杯A・杯蓋Bがある。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Dがみられる。出土量は少ないがまとめて出土している。

土器群の特徴を抽出すると、食器が須恵器のみで構成される、須恵器杯Aは回転糸切り未調整だが底径は大きく外傾指数は64である(70)、土師器甕Bには口縁部～体部内面にハケ調整がされるなどいわゆる定型化の直前の形態・手法がみられる、小型甕Dがともなう、などの点が挙げられる。

量には少ないものの、これらのことからみて概ね5期4期末の様相を示し、須恵器杯や土師器甕のあり方から同時期の5住出土土器群よりは古い様相を呈するものと考えられる。

7住出土土器群 (79～148) 70点を図化した。食器には黒色土器A杯A・碗・皿B・皿(無台)・鉢A、須恵器杯A、軟質須恵器杯A、灰釉陶器碗・皿、緑釉陶器A類皿がある。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Dがみられる。貯蔵具には須恵器短頸壺C・甕Aがある。これらはまとまった状態でカマド周辺や床面、覆土下層に多量に廃棄されたものである。

土器群の特徴は次のとおりである。食器の主体は黒色土器Aが占め、杯の他碗・皿Bがともなう。須恵器杯Aと軟質須恵器杯Aが少量ともなうが、出土量が多いにもかかわらず土師器の杯・碗はまったくみられない。須恵器杯Aは外傾指数がいずれも100を超える。古手とされるA類の緑釉陶器がともなう(137)。土師器甕Bは定型化している。ハケ塗り施釉の灰釉陶器が破片でわずかにともなう。

これらのことから、本址出土土器群は7期の様相を示し、そのなかでも比較的新しい段階に位置づくものと考えられる。

8住出土土器群 (149～167) 19点を図化した。食器に黒色土器A杯A・碗・皿B・鉢A、煮炊き具には土師器甕B・小型甕Dがみられる。本土器群もカマド内外や床面からの一括出土品である。

土器群の特徴は7住と同様、食器の主体を黒色土器A杯の他碗・皿Bで占められる。須恵器杯、土師器杯・碗はみられない。土師器甕Bは定型化している。

これらの点と、7住出土土器群との比較から、両者はほぼ同時期に位置づくものと考えられ、7期の様相と理解される。

9住出土土器群 (168～190) 28点を図化した。食器には黒色土器A杯A・碗・皿B・鉢A、須恵器杯Aがみられる。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Dが存在する。貯蔵具には須恵器壺・甕A、緑釉陶器A類手付瓶(図版参照)がある。これらは出土状況から一括品と捉えられる。

土器群の特徴をみると食器の主体は黒色土器Aで、杯の他碗・皿Bがともなう。須恵器杯Aも少数だが存在する反面、軟質須恵器や土師器はまったくもなっていない。須恵器杯Aは外傾指数100未満である。土師器甕Bは定型化し、非常に薄手で口縁部の外反が強い。

これらのことから、本址出土土器群は7期の様相を呈するが、須恵器杯や土師器甕等の特徴からみて7・8住出土土器群より古い段階に位置づけられるものと考えられる。

10 住出土土器群 (191～215) 27点を図化した。食器には黒色土器A杯A、黒色土器B碗、須恵器杯A、蓋Bがみられる。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Dが、貯蔵具には須恵器長頸壺A・甕Aが存在する。これらは出土状態からみて一括資料として捉えられるものである。

土器群の特徴としては食器の構成が黒色土器Aを主体とするが碗・皿Bはみられず、須恵器杯Aが確実にともなっている。黒色土器A杯Aにおける内面のヘラミガキは、他の住居址出土資料に比較して入念に行われており、また口径に比較して底径が大きく6cmを下回るものはまったくみられない。軟質須恵器や土師器杯・碗もみられない。須恵器杯Aは外傾指数100未満である。土師器甕Bは定型化し、7・8住出土品などと比較して非常に薄手で口縁部の外反も強い。

このような点から本址出土土器群は須恵器杯類の割合がやや低いものの、7～9住出土土器群などと比較して明らかに古い様相を呈しており、その特徴からみて6期まで遡るものと考えられよう。なお組成中には黒色土器B碗(205)がみられるが、この時期のとしては非常に稀であり、おそらく11期以降のものが混入した可能性が高い。

11 住出土土器群 (216～245) 30点を図化した。食器に土師器杯A・碗・皿A・盤B、黒色土器A杯A・碗、黒色土器B碗、灰釉陶器碗・段皿、煮炊き具に土師器甕D・小型甕Dがあり、これらはよくまとまった状態で出土している。

本土器群の特徴はまず食器の構成が土師器と黒色土器Bが主体であることが挙げられ、さらに土師器杯Aに口径10cm内外で器高が3cmを下回るものが多いこと、土師器皿Aや盤Bがともなうこと、3点出土した土師器皿Aはいずれも口縁部ヨコナデの手法が丁寧で古い相を示す、黒色土器Aや土師器碗に小碗がみられること(225・230・232)、黒色土器Bの碗が顕著にみられること、灰釉陶器が深碗や小径の段皿で構成されること、煮炊き具に土師器甕がなく、甕Dが存在すること、などの点を指摘できる。

このような特徴からみて、本土器群は14期の土器組成を非常によく示しているものと捉えられる。なお組成中にみられる黒色土器A杯A(228)は状況的にみて混入品と考えられる。

12 住出土土器群 (246～265) 20点を図化した。食器には土師器皿(無台)、黒色土器A杯A・碗・皿B、軟質須恵器杯A、灰釉陶器碗・段皿がある。煮炊き具は土師器甕B・甕Bがみられる。これらはまとまった状態でカマド周辺や覆土下層～床面に廃棄されたものである。

土器群の特徴としては、食器の主体を黒色土器Aが占め、杯の他碗・皿Bがともなう、軟質須恵器杯Aや土師器皿がともなう、須恵器の食器類はみられない、三日月高台・刷毛塗り施釉の灰釉陶器をともなう、土師器甕Bは定型化以後のもので7・8住や10住出土資料に比較して口縁部の外反が弱く立ち上がりが高い、器壁も厚めで口縁短部が面取り気味である、などの点を指摘しよう。

これらのことから、本址出土土器群は3住出土土器群と同様、8期の様相を呈するものと捉えられよう。なお灰釉陶器碗には黒笹14号窯式に比定される古い特徴を有するものが存在する(262)。

13 住出土土器群 (266～269) 4点を図化した。食器に黒色土器A杯A、須恵器杯A・杯Bがある。煮炊き具には土師器甕B・小型甕Dがあり、貯蔵具として須恵器壺がある。黒色土器杯Aが完形品である以外、まとまった状態で出土したものはなく、資料的に貧弱である。

土器群の特徴としては食器に須恵器が多い、定型化した土師器甕Bは薄手で口縁部が短く外反する、などの点が挙げられる。

本址出土土器群は資料的に非常に乏しいが、6期前後の様相を呈するものと考えたい。

14 住出土土器群 (270～280) 11点を図化した。食器には軟質須恵器杯Aと灰釉陶器皿がある。煮炊き具は土師器甕Bがみられる。これらはまとまった状態でカマド内外に廃棄されたものである。

土器群は食器に軟質須恵器、灰釉陶器がみられる、土師器甕Bは定型化以後の形態で、12住出土資料と同様

に口縁部の外反が弱く立ち上がりが高い、底部付近の外面にヘラケズリが行われ器壁が厚い、ハケメに粗いものが目立つ、などの特徴を有している。

これらのことから、本址出土土器群は12住出土土器群と同様、8期の様相と捉えられるが、本来確実に組成に加わるべき黒色土器の食器類を欠如している。

15住出土土器群(281~287) 7点を図化した。食器には須恵器杯B・杯蓋Bがある。煮炊き具は土師器甕B・小型甕Dがみられる。出土量は少ないがまとめて出土状況を呈する。

土器群には食器が須恵器のみで構成される、土師器甕Bは定型化した段階のもので薄手で口縁部が短く外反の強いものがともなう、といった特徴がみられる。

量的に少なく様相は判然としませんが、食器と煮炊き具の状況から6期頃の様相と考えたい。

③小結

これまで各住居址出土土器群の様相について観察し、その帰属時期について推定してきたが、特に良好な一括資料としては6期の10住出土土器群、7期の7住出土土器群、8期の3住出土土器群、14期の11住出土土器群が挙げられ、標式的な資料となりうるものである。また一括土器群を出土した8・9・10住については建て替えによる連続的な切り合い関係を有しており、6~7期の短い時間幅のなかでの土器様相の推移を観察するうえで格好の資料となろう。

なお出土土器群は大きく5~8期(3・5~10・12・14・15住出土土器群)、11~12期(2・4住出土土器群)、14期(11住出土土器群)の期的まとまりに括ることが可能であり、集落の消長を知る手がかりとなろう。

(2) 文字関係資料(第5・6表)

文字にかかわる資料として墨書土器、窺青土器、転用硯が出土している。

墨書土器 小破片まで含め66点もの量が出土している。それらの個々の観察については一覧表に記した。

まず時期・遺構別の出土状況とみると6期~8期の住居址出土土器にほぼ限定される。最も出土点数の多い遺構は7期の7住で、合計27点で全体の41%にも達する。次いで多いのが9住で12点・18%、以下8・10・12住が各7点・11%である。7住のきわだった多さが目を引く。

次に土器の種類・器形についてみると墨書の行われる種別はほとんどが黒色土器Aの杯Aで、わずかに須恵器杯Aや灰釉陶器碗がある。ちなみに墨書土器を出土した7~10住の実測個体数に占める墨書土器の割合を算出すると、黒色土器Aは105点中62点で59%、須恵器は11点中3点で27%、灰釉陶器8点中1点で13%となり、黒色土器Aの割合がいかに高いかを示している。

では墨書がなされる部位と方向はどうか。黒色土器Aでは多くが体部外面に施される。底部外面は少なく、しかもその場合体部と底部の2カ所に行う。須恵器は体部のみ認められ、灰釉陶器は底部に施される。墨書の方向は複数字句の場合必ず体部に横位で書かれ、1文字の場合は方向は限定されていない。

文字の内容については判読できないものが多々ありすべてを解読できたわけではないが、6期に「木」、「舍」、「寛」、「信/酒坏」、「柴/酒坏か」などがあり、7期には「子由太」、「子」、「子/子」、「㊦」、「三子」、「三」、「□磨」、「磨」、「賀」、「衣または花か」、「秀」、「巴」、「正八か」などがみられる。また8期では「永か」、「巴か」、「子か」などが存在している。

これらの文字のうちある程度その示す意味が窺えるものについてみると、まず施設を示すものとして「舍」があり、これまでに集落址から出土した例が非常に少ないだけに重要である。次に記されたものの用途を表すものに「酒坏」がある。また人名を表すと思われるものとして「磨」、「□磨」、「信」などが挙げられる。7住からまとめて、また8住からも1点が出土した「子由太」も人名に由来する可能性があり、7・8・9住にみ

られる「子」や「㊦」はその省略形とも受け取れ、8住の「三子」もこれに関連するものかもしれない。さらに多量に出土した「子由太」の文字について筆跡を詳しく観察すると3種類ほどの書体が存在することに気づき、書き手が複数いたことを示している。これまでに知られている三間沢川左岸遺跡の「王」、下神遺跡の「而」や「厶」などの例のように、7住を中心として8住をはじめ周囲の複数の住居址で共有される文字である可能性も十分考えられよう。

鏡書土器 8住より1点出土している(154)。黒色土器A杯Aの見込み部分に大きく×印が記されており、焼成前に先の細い筥状工具で書かれたものである。

転用硯 摩滅の状況や墨の付着から転用硯と推定されるものが3点出土している(38・241・273)。38は8期の3住から出土した須恵器皿で、内面に著しい摩滅と墨痕が観察される。241は14期の11住からの出土品で、灰釉陶器段皿の底部内面に摩滅と墨痕が残る。273は8期の14住から出土した灰釉陶器皿で、内面見込みに著しい摩滅と墨痕が残されている。なお朱墨の付着した土器や転用硯は今回出土していない。

(3) 鉄製品(第27図)

鉄製品は合計9点が出土した。それらはすべて住居址からの出土品である。以下、器種ごとに概観する。

刀子(3) 5住から1点出土している。身部と茎部の大半を欠損し、関は棟側の片関である。身部最大幅は1.0cm、茎部幅0.6cmを測る。

鎌(6) 11住から1点出土した。長三角形鎌で、茎尻を欠損する。身部は長さ6.0cm・厚さ0.2cmを測り、断面形は両丸造り、関はやや逆刺状を呈する。筥被部は長さ2.8cmで断面長方形、茎部は断面方形を呈する。身部片面の一部に木質の付着がみられる。

斧(7・8) ゆるい撥形を呈する袋状鉄斧が4住と10住から各1点出土した。2点ともほぼ同形同大で、7は最大長7.0cm・刃部幅4.1cm、8が最大長6.8cm・刃部幅3.6cmを測る。刃部の形状は7が円刃状を呈するのに対し、8は直刃状となる。着柄部は両側縁をのばして袋状に折り返し、その断面形は長さ2.7～3.0cm・幅1.0cmほどの方形を呈する。

鍔鉄(2) 3住から1点出土した。山形をなす基部の頂部付近に円孔を設ける。裾部は幅広に突出させ立ち上がりは鈍い。底部は中央を凹ませる。基部の幅8.2cm・高さ3.9cm・厚さ0.4cmを測る。

釘(9・10) 10住から2点出土している。同位置からの出土品だが接合はしない。どちらも頭部と先端部を欠損しており、全形は不明である。断面は方形を呈し9が0.5mm、10が0.6cmを厚さを測る。

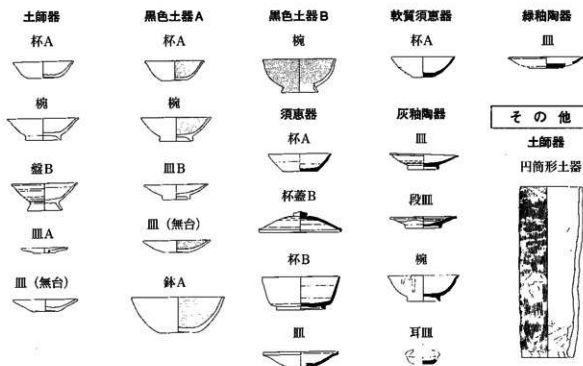
刀装具(1) 1は3住より出土したもので、その形状から刀装具かと考えられる。2個が鑄着しており、内法で長径2.9cm・幅1.2cm、長径3.2cm・幅1.6cmをそれぞれ測る。断面形は小さめの1点が平たく、大きいめのものは半円形で内側が平坦に作り出される。

紡錘車(5) 7住より1点出土した。直径3.9cm・最大厚0.3cmを測り、端部は丸く作り出される。片面の縁辺部に瘤状の突起が2個並列し、中心に軸孔の痕跡がみえないので紡錘車ではない可能性もある。

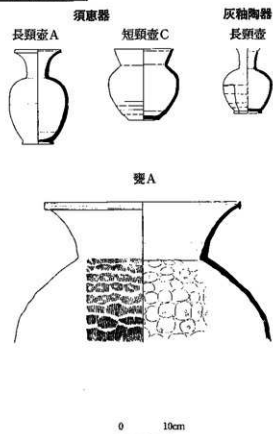
(4) 銅製品(第27図)

4は銅鏡埋納遺構から出土したもので、直径4.9cm・厚さ0.2～0.3cmを測る小型の円鏡である。縁の断面形は三角形を呈し、鏡面は平滑で緩い凸面をなす。総じて表面処理が丁寧であるのに対し鏡背は粗くざらつき、鑄型成型の際の工具痕などがみえ凹凸が激しい。一見無紋のようだが、仔細に観察すると縁に沿って直径0.7cm内外の低い円形の突起があり、それが5単位等間隔に配されることから珠紋として施紋されたものと捉えらる。鈕座の断面形は低い台形を呈し、鈕孔は直径0.2cmを測る。地金やや劣化がやや進行し、端部に剥落を生じている。

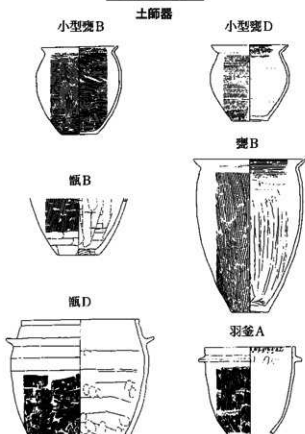
食器



貯蔵具



煮炊具



第16図 出土土器の種別・器形

第3表 出土器実測個体数一覧

器種	器彩	1住	2住	3住	4住	5住	6住	7住	8住	9住	10住	11住	12住	13住	14住	15住	16住	17住	18住	19住	20住	21住	22住	合計			
土師器	杯A	2	2	1	3								6												14		
	椀	1	1												1											3	
土師器	皿A																									3	
	皿(高台無)													1												1	
食器	盤B												2													2	
	杯A	2	1	11	1	26	7	5	12	1	3	1														71	
	杯Aor碗	1	2			8	1	6	2	1	3										2					1	
	椀	1	1	3	2	6	4	5	3	3	3															28	
	皿B					4	3	1																		9	
	皿(高台無)					1																				1	
	鉢A	1				2	1	1																1		6	
	鉢A				1																						9
	鉢B				1																						15
	須恵器	杯A		2	2	3		4	3																		2
須恵器	鉢B																										1
	皿				2																					2	
煮炊器具	軟須				1																					1	
	杯A			2		4								2							3					12	
	灰碗	4	4	2										2	2											17	
	段皿	1	2												1	2										6	
	陶皿			1																						4	
	陶器			1																						1	
	耳皿																									1	
	緑釉																									1	
	煮炊器具	甕B																									1
		甕B			1	2	2	2	4					2	1	7	2										26
小型甕B				1																						1	
小型甕D				1	3	2	1	1	2						2											17	
羽釜A				4		1																				1	
羽釜or甕		1	4		1																					6	
甕B																					1					1	
甕D				1																						1	
円筒形土器																										2	
貯蔵器具		長頸甕A			1		3																				4
	短頸甕C	1		1																						3	
	須恵器																									1	
	甕														1											2	
	甕A																									4	
	その他																									1	
	灰釉																									1	
	合計	8	18	35	11	5	9	70	19	28	27	30	20	4	11	7	3	1								308	

第4表 出土器一覽

種別	出土順	遺物	遺彩	法量 口径	口径 高さ	保存度 口縁	外周	内周	調査 内容	備考
1	1住	土師器	杯A	11.0	4.2	3.9	淡褐色	淡褐色	ロクロナデ	
2	1住	土師器	杯	7.1	7.1		褐色	褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	
3	1住	黒色土器A	杯	7.8	7.8		褐色	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面ミガキ・黒色処理	
4	1住	土師器	杯A	13.6		1/2	淡褐色	淡褐色	ロクロナデ	
5	1住	黒色土器A	杯A	5.7		(完)	淡褐色	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
6	1住	須恵器	杯細盤	6.2		(完)	淡褐色	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	
11	1住	土師器	杯A	19.1			淡褐色	黒	ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	
7	2住	土師器	羽釜Aor飯	10.4	4.2	2.7	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ、胴輪付のちナデ	
8	2住	土師器	杯	13.3		完	明褐色	明褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り	
9	2住	土師器	杯A	12.5	6.0	3.7	淡褐色	淡褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	
10	2住	黒色土器A	杯A	14.0	6.6	4.8	1/2(1/2)	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り	
11	2住	黒色土器A	杯or碗		7.2		薄一灰	黒	ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	
12	2住	灰輪陶器	杯	12.4	6.4	4.1	1/2(完)	淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
13	2住	灰輪陶器	杯	15.0	7.2	4.2	1/3	淡灰	ロクロナデ、付高台のちナデ	
14	2住	灰輪陶器	杯	16.0	8.0	5.2	一部(1/2)	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	
15	2住	灰輪陶器	杯	16.2	8.3	5.3	1/2(完)	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	
16	2住	灰輪陶器	杯	12.3	7.0	2.2	完	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
17	2住	灰輪陶器	杯	13.7	7.8	2.7	3/5(完)	黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	
18	2住	土師器	小型碗D	11.1		完	暗褐色	暗褐色	ロクロナデ、胴輪付のちナデ	
19	2住	土師器	羽釜Aor飯D	18.7		1/4	暗褐色	暗褐色	ナデ、ヨコナデ、胴輪付のちナデ	
20	2住	土師器	羽釜Aor飯D	26.9		1/4	暗褐色	暗褐色	ナデ、ヨコナデ、胴輪付のちナデ	
21	2住	土師器	羽釜Aor飯D	26.9		1/4	暗褐色	暗褐色	ナデ、ヨコナデ、胴輪付のちナデ	
22	2住	土師器	碗D	27.0	21.9	23.8	薄一暗褐色	明褐色	ナデ、ヨコナデ、胴輪付のちナデ、器筒部へラケズリ	
23	2住	土師器	羽釜Aor飯D	27.0		一部	暗褐色	黒褐色	ナデ、ヨコナデ、胴輪付のちナデ	
24	3住	土師器	杯A	12.9	5.3	3.7	1/8(1/2)	淡褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り	
25	3住	黒色土器A	杯A	12.8	6.0	3.7	一部(完)	淡褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
26	3住	黒色土器A	杯A	13.0	4.8	4.1	1/4(1/2)	淡褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
27	3住	黒色土器A	杯A	13.5	6.5	4.1	3/4(1/2)	黄褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
28	3住	黒色土器A	杯A	13.0	6.1	3.9	一部(完)	薄一暗褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
29	3住	黒色土器A	杯A	13.2	6.2	4.2	薄一暗褐色	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	
30	3住	黒色土器A	杯A	12.3	4.9	4.7	1/2(完)	淡褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理	

品名	仕上り	重量	寸法	色	加工	備考
30	3住 黒色土器A	杯A	129 5.5 4.3	完	淡褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、内面ミガキ、黒色処理
31	3住 黒色土器A	杯A	135 5.4 4.0	一部(完)	粉褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、内面ミガキ、黒色処理
32	3住 黒色土器A	杯A	164 7.0 5.4	1/4(3/4)	褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切りのみナデ、内面ミガキ、黒色処理
33	3住 黒色土器A	杯A	16.0	1/4	淡褐色	黒 ロクロナデ、内面ミガキ、黒色処理
34	3住 黒色土器A	杯A	150.0 6.2 6.2	1/3(完)	淡褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切りのみナデ、内面ミガキ、黒色処理
35	3住 黒色土器A	杯cor様	13.4		淡褐色	黒 ロクロナデ、内面ミガキ、黒色処理
36	3住 黒色土器A	樽	152 7.6 5.2	2/3(完)	淡褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、付高台のみナデ、内面ミガキ、黒色処理
37	3住 黒色土器A	鉢A	22.0 10.5 8.9	一部(1/2)	淡褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、内面ミガキ、黒色処理
38	3住 須臾器	皿	16.0 5.6 3.3	1/4(一部)	明灰	明灰 ロクロナデ、底部距能糸切り
39	3住 軟質須臾器	杯A	13.4 5.2 3.3	1/4(完)	明灰一黒灰	明灰一黒灰 ロクロナデ、底部距能糸切り
40	3住 軟質須臾器	杯A	13.3 5.9 3.9	3/4(完)	淡灰	淡灰 ロクロナデ、底部距能糸切り
41	3住 須臾器	長頸瓶A		1(完)	明灰	明灰 ロクロナデ、底部距能糸切り、付高台のみナデ
42	3住 兵輪陶器	樽	14.6 7.7 4.4	完(1/2)	灰白	灰 ロクロナデ、下半一底部距能ヘラケズリ、付高台のみナデ
43	3住 兵輪陶器	樽	18.0 7.4 6.0	1/3(一部)	灰	灰 ロクロナデ、下半距能ヘラケズリ、付高台のみナデ
44	3住 兵輪陶器	樽	18.5 8.0 6.7	1/3(一部)	灰白	灰白 ロクロナデ、下半距能ヘラケズリ、付高台のみナデ
45	3住 土師器	小型罎D	10.5 6.1 9.2	一部(完)	淡褐色	淡褐色 ロクロナデ、底部距能糸切り、口縁部内面ミガキ
46	3住 土師器	小型罎D	7.5	(完)	淡褐色	淡褐色 ロクロナデ、底部距能糸切り
47	3住 土師器	雙耳		(完)	樽	樽 内面ナデ、外周カキメ、ヘラケズリ
48	3住 兵輪陶器	樽	18.0	1/3	灰	灰 ロクロナデ、下半距能ヘラケズリ
49	3住 兵輪陶器	耳皿	4.4	(完)	灰白	灰白 ロクロナデ、底部距能糸切り
50	3住 兵輪陶器	段皿	17.4 7.3 3.2	1/3(1/2)	灰白	灰白 ロクロナデ、下半一底部距能ヘラケズリ、付高台のみナデ
51	3住 兵輪陶器	段皿	18.0 8.6 3.2	1/4(1/3)	灰白	灰白 ロクロナデ、下半一底部距能ヘラケズリ、付高台のみナデ
52	3住 土師器	円筒形土器		1(1/4)	樽	樽 内面ナデ、外周ハケメ、下蓋ヨコナデ、ヘラケズリ
53	3住 土師器	小型罎D	11.1	1(1/6)	樽一明樽	樽 ロクロナデ、外周カキメ、底部距能糸切り
3住 黒色土器A	樽	7.3	1(1/2)	明褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、付高台のみナデ、内面ミガキ、黒色処理	
3住 黒色土器A	樽	6.8	(完)	黄褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、付高台のみナデ、内面ミガキ、黒色処理	
3住 黒色土器A	杯cor様	15.0	1/6	淡褐色	黒 ロクロナデ、内面ミガキ、黒色処理	
3住	土師器	小型罎D		胴一全体部	樽一明樽	樽 ロクロナデ、外周カキメ、口縁部内面カキメ
54	4住 土師器	杯A	10.2 4.4 3.0	完	粉褐色	粉褐色 ロクロナデ、底部距能糸切り
55	4住 土師器	杯A	11.2 5.6 3.0	1/8(3/4)	明褐色	明褐色 ロクロナデ、底部距能糸切り
56	4住 土師器	杯A	12.4 5.2 4.2	1/6(1/2)	暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、底部距能糸切り
57	4住 黒色土器A	樽		(黄台欠)	暗褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、付高台のみナデ、内面ミガキ、黒色処理
58	4住 黒色土器A	樽	7.4	(完)	暗褐色	黒 ロクロナデ、底部距能糸切り、付高台のみナデ、内面ミガキ、黒色処理
59	4住 黒色土器A	樽	12.8	1/3	暗褐色	暗褐色 ロクロナデ、内面ミガキ、黒色処理
60	4住 兵輪陶器	樽	150.0 8.0 5.1	1/4(1/2)	明灰	明灰 ロクロナデ、底部距能ヘラケズリ、付高台のみナデ

階	地上準点	種別	用途	面積	容積率	高さ	色	位置	備考
61	4住	灰陶機器	機	15.4	8.4	5.3	1/6(1/5)	明灰	ロクロナデ、付高台のちナデ
62	4住	灰陶機器	皿	19.6	7.0	2.3	1/3(9/6)	明灰	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、付高台のちナデ
63	4住	土師器	羽釜A	25.2			元	褐一暗褐	ハタテ、ヨコナデ、胴貼付のちナデ
64	4住	土師器	羽釜AorB	26.6			1/4	暗褐	ナデ、ヨコナデ、胴貼付のちナデ
65	5住	黒色土器A	杯A	5.2			0/4	黒	ロクロナデ、内面ミダキ・黒色処理
66	5住	須恵器	杯A	14.0	8.2	3.1	1/2(元)	明灰	ロクロナデ、底面陶輪糸切り
67	5住	須恵器	杯A	14.2	7.5	4.1	1/2(元)	明灰	ロクロナデ、底面陶輪糸切り
68	5住	土師器	小笠原B	10.0			一部	暗褐	内外面ハタテ、底面ナデ
69	5住	土師器	罌B	26.0			一部	暗褐	口縁部ヨコナデ、外面・胴部内面ハタテ、内面ナデ
70	6住	須恵器	杯A	14.0	8.2	4.5	元	黄灰	ロクロナデ、底面陶輪糸切り
71	6住	須恵器	杯A		6.6		(元)	明灰	ロクロナデ、底面陶輪糸切り
72	6住	須恵器	罌B	15.0			1/8	明灰	ロクロナデ、又井部陶輪ヘラケズリ
73	6住	須恵器	罌B	13.2			1/8	明灰	ロクロナデ、又井部陶輪ヘラケズリ
74	6住	土師器	小笠原D	11.4			1/5	暗橙褐	ロクロナデ、外面・口縁部内面ナギメ
75	6住	土師器	小笠原D		8.0		1/4	暗橙褐	ロクロナデ、外面ナギメ、底面陶輪糸切り
76	6住	土師器	小笠原D		5.4		(元)	暗橙褐	ロクロナデ、底面ヘラケズリ
77	6住	土師器	罌B	19.1	8.9	32.7	4/2(一厚)	淡黄褐	ロクロナデ、胴部外面ヨコナデ、胴部外面ナギメ、内面ハタテ、底面外周ヘラケズリ、底面ナデ
78	6住	土師器	罌B	21.4	12.6	34.6	1/2(2/3)	黄褐	ヨコナデ、外周ハタテ、内面・底面ナデ
79	7住	黒色土器A	杯A	13.0	5.4	4.2	1/4(元)	淡黒一黒	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
80	7住	黒色土器A	杯A	12.2	6.0	4.1	1/5(元)	暗褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
81	7住	黒色土器A	杯A	13.6	6.4	4.2	1/6(元)	暗橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
82	7住	黒色土器A	杯A	12.6	6.2	4.0	1/3(1/4)	暗褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
83	7住	黒色土器A	杯A	14.2	6.0	4.1	1/3(元)	暗褐一黒	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
84	7住	黒色土器A	杯A	13.6	7.2	3.9	3/4(元)	暗橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
85	7住	黒色土器A	杯A	14.0	6.2	4.1	1/3(1/6)	灰褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
86	7住	黒色土器A	杯A	13.4	5.6	3.9	1/3(元)	暗橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
87	7住	黒色土器A	杯A	13.6	7.4	4.4	1/10(1/3)	暗橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
88	7住	黒色土器A	杯A	13.2	6.2	4.3	1/6(1/2)	暗橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
89	7住	黒色土器A	杯A	13.2	4.2	5.0	1/2(元)	暗褐一黒	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
90	7住	黒色土器A	杯A	14.6	6.1	4.1	1/3(元)	暗褐一暗褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
91	7住	黒色土器A	杯A		7.0			暗褐一黒	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
92	7住	黒色土器A	杯A	16.4	7.0	4.8	1/8(1/4)	暗橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
93	7住	黒色土器A	杯A	14.6	5.2	4.4	1/3(元)	淡橙褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
94	7住	黒色土器A	杯A	13.6	6.4.6.	4.1	1/2(1/5)	暗褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理
95	7住	黒色土器A	杯A	13.2	4.	4.0	2/3(1/2)	暗褐	ロクロナデ、底面陶輪糸切り、内面ミダキ・黒色処理

酒種	出土地	銘柄	造り	容量	樽数	樽重	樽高	樽径	外蓋	内蓋	蓋裏	蓋底	蓋縁
96	7住	黒色土器A	杯A	126	5.8	3.7	3/4(元)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
97	7住	黒色土器A	杯A	174	7.8	6.2	一部(元)		漆樽一黒	黒			外蓋蓋
98	7住	黒色土器A	杯A	126	5.2		(2/3)		漆樽	黒			外蓋蓋
99	7住	黒色土器A	杯A	126	5.6	4.1	1/4(2)		漆樽	黒			外蓋蓋
100	7住	黒色土器A	杯A	142	6.4	3.9	一部(1/3)		叩煙筒一黒	黒			外蓋蓋
101	7住	黒色土器A	杯A	141	5.8	4.5	1/8(元)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
102	7住	黒色土器A	杯A	140	6.2	4.3	1/3(1/3)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
103	7住	黒色土器A	杯A	18.0	7.6	6.6	1/4(元)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
104	7住	黒色土器A	杯A			5.6	(1/4)		漆樽	黒			外蓋蓋
105	7住	黒色土器A	杯or椀	334			一部		漆樽	黒			外蓋蓋
106	7住	黒色土器A	杯or椀	354			2/3		漆煙筒	黒			外蓋蓋
107	7住	黒色土器A	杯or椀				一部		漆樽	黒			外蓋蓋
108	7住	黒色土器A	杯or椀				一部		叩煙筒	黒			外蓋蓋
109	7住	黒色土器A	杯or椀				一部		叩煙筒	黒			外蓋蓋
110	7住	黒色土器A	杯or椀				小片		漆樽	黒			外蓋蓋
111	7住	黒色土器A	杯or椀				一部		漆樽	黒			外蓋蓋
112	7住	黒色土器A	椀	142			1/4(1/2)		漆樽	黒			外蓋蓋
113	7住	黒色土器A	椀	15.0	7.4	5.4	元		叩煙筒	黒			外蓋蓋
114	7住	黒色土器A	椀			6.6	(元)		漆樽	黒			外蓋蓋
115	7住	黒色土器A	杯or椀				一部		漆樽	黒			外蓋蓋
116	7住	黒色土器A	椀	15.0	6.6	5.6	元		叩煙筒一黒	黒			外蓋蓋
117	7住	黒色土器A	椀	144	6.2	4.7	1/4(3/4)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
118	7住	黒色土器A	椀	15.2	7.2	5.1	元		叩煙筒	黒			外蓋蓋
119	7住	黒色土器A	皿B	14.0	5.8	3.2	1/10(元)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
120	7住	黒色土器A	皿B	13.2			1/8(1/2)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
121	7住	黒色土器A	皿B	14.5	6.2	2.8	2/5(元)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
122	7住	黒色土器A	皿B	13.8	5.6	2.5	1/2(5/6)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
123	7住	黒色土器A	皿	13.9	7.8	3.0	3/5(元)		叩煙筒	黒			外蓋蓋
124	7住	黒色土器A	鉢A	24.4			1/8		叩煙筒	黒			外蓋蓋
125	7住	黒色土器A	鉢A	24.0			1/5		叩煙筒	黒			外蓋蓋
126	7住	須恵	杯A	13.0			1/2		灰一叩煙筒	灰			外蓋蓋
127	7住	軟質須恵器	杯A	13.0	5.0	3.4	1/5(1/2)		灰	灰			外蓋蓋
128	7住	須恵器	杯A	12.8	5.6	3.2	1/6(一部)		叩煙筒	灰			外蓋蓋
129	7住	軟質須恵器	杯A	12.6	5.8	4.0	1/3(元)		灰	灰			外蓋蓋
130	7住	須恵器	杯A	13.6	5.4	3.3	1/6(一部)		叩煙筒	灰			外蓋蓋

階 数	地上部品	種別	形状	注意		位置		色		備考
				床	壁	天井	外壁	内装	床	
131	7住	軟質床面材	枠A	13.6	5.4	4.0	1/4(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切
132	7住	床脚部	枠	18.0		1/3		灰	灰	黒銅毛塗り
133	7住	床脚部	黒	15.4		1/6		灰	灰	黒銅毛塗り
134	7住	軟質床面材	枠A	14.2	5.8	4.1	1/2(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切
135	7住	床脚部	枠	18.4		1/3		灰	灰	黒銅毛塗り
136	7住	床脚部	黒	7.8		(6)		灰	灰	黒銅毛塗り
137	7住	軟質床面材	枠	16.0	7.2	2.4	一部(4/5)	灰	灰	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ
138	7住	土脚部	小型壁D	12.6		1/10		黒	黒	ヨコナデ、床部外壁・口縁部内面カキメ、内面ロクロナデ
139	7住	土脚部	円筒形土器	15.6		1/8		黒	黒	ヨコナデ、外壁ハケメ、内面ナデ
140	7住	土脚部	円筒形土器		11.0	(1/4)		黒	黒	外壁ハケメ、下層ハケメ、内面ナデ
141	7住	土脚部	小型壁D	12.8		1/10		黒	黒	ヨコナデ、床部外壁・口縁部内面カキメ、内面ロクロナデ
142	7住	土脚部	円筒形土器			1/8		黒	黒	外壁ハケメ、内面ナデ
143	7住	須臾器	壁A	43.0		1/6		黒	黒	ロクロナデ
144	7住	須臾器	壁A	26.0		1/8		黒	黒	ロクロナデ
145	7住	床脚部	段脚部	12.0		先		灰白	灰白	ロクロナデ
146	7住	須臾器	壁部C	8.4	5.0	10.2	1/2(5)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切
147	7住	土脚部	壁B	24.0	10.4	31.4	先	黒	黒	ヨコナデ、外壁ハケメ、口縁部内面カキメ、内面ナデ、底層ナデ
148	7住	土脚部	壁B	22.2	10.4	30.8	3/4(4/5)	黒	黒	ヨコナデ、外壁ハケメ、口縁部内面カキメ、内面ナデ、軟ナデ、底層ナデ
149	8住	黒色土器A	枠A	13.9	7.0	3.6	1/5(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
150	8住	黒色土器A	枠A	13.7	6.0	3.9	7/8(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
151	8住	黒色土器A	枠A	13.0	5.4	3.9	1/2(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
152	8住	黒色土器A	枠A	13.8	6.6	3.8	5/6(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
153	8住	黒色土器A	枠A	15.6	6.6	4.8	1/2(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
154	8住	黒色土器A	枠A	12.3	5.0	4.0	先	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
155	8住	黒色土器A	枠A	13.0	6.4	4.1	1/3(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、内面ミガキ・黒色処理
156	8住	黒色土器A	枠or壁	12.8			一部	黒	黒	ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理
157	8住	黒色土器A	壁B	13.4	6.4	3.4	5/6(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
158	8住	黒色土器A	壁	14.4	6.6	4.6	先	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
159	8住	黒色土器A	壁	15.2	7.1	5.1	一部(1/2)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
160	8住	黒色土器A	壁	15.4	7.9	5.1	2/3(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
161	8住	黒色土器A	壁B	14.8		1/8(9)		黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
162	8住	黒色土器A	壁B	13.3	6.2	3.1	1/2(9)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
163	8住	黒色土器A	壁	15.4				黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切、付着白のちやデ、内面ミガキ・黒色処理
164	8住	黒色土器A	枠A	26.6	10.4	13.4	2/3(1/2)	黒	黒	ロクロナデ、底層回転床切のちやデ、口縁部外壁ミガキ、内面ミガキ・黒色処理
165	8住	土脚部	小型壁D	12.0		1/4		黒	黒	ロクロナデ、床部外壁・口縁部内面カキメ

順 No.	出生年月	選手 名	登録 名	性別	毛色	調教 場	調教 者	調教 方法	調教 回数	調教 内容	備考
229	11住	黒土善A	杯Aor線	13.4	1/5	晴草場	黒	ロロナゾ、内面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	
230	11住	黒土善A	線	10.0	5.4	2.8	1/4(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	
231	11住	黒土善A	線	14.0	6.8	5.9	1/2(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	
232	11住	黒土善A	線	11.1	6.1	4.3	1/2(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	
233	11住	黒土善B	線	15.0	7.0	6.3	1/2(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	外周黒染け
234	11住	黒土善B	線	14.9	6.4	6.4	完	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	糸付欠
235	11住	黒土善B	線	6.5			(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染け
236	11住	黒土善B	線	16.2			3/4(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染け
237	11住	黒土善B	線	15.0	7.1	7.1	完	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染け
238	11住	黒土善B	線	14.7	6.8	6.5	完	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染け
239	11住	黒土善B	線	10.4	5.9		1/2(完)	ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染け
240	11住	杯轉脚線	線	14.8	8.0	5.6	1/5(完)	杯		ロロナゾ、体幹下半部脚転糸へラケズリ、付高台のちナゾ	脚線行掛け、内面黒染
241	11住	杯轉脚線	段線	11.9	6.3	2.3	1/2(完)	淡紫灰		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ	内面黒染、底面脚転糸線、黒染
242	11住	杯轉脚線	線	15.3	8.1	6.9	1/2(完)	淡紫灰		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ	脚線行掛け、内面黒染
243	11住	土師器	小型線D?	13.6			1/5	晴草場		ロロナゾ	
244	11住	土師器	小型線D	11.7	6.0	11.1	1/3(1/2)	晴草場		ロロナゾ、底面脚転糸切り	
245	11住	土師器	幅D	25.2	21.5	25.0	1/2(2/3)	晴草場		ヨコナゾ、外周ハケメ、内面ナゾ、脚線付のちナゾ	羽釜を転用か 内外面黒染け
246	12住	土師器	線	13.5	4.6	2.5	完	晴草場		ロロナゾ、底面脚転糸切り	
247	12住	黒土善A	杯A	13.0	5.9	3.9	1/4(2/3)	雲母一層脚		ロロナゾ、底面脚転糸切り、内面ミダギキ・黒色処理	
248	12住	黒土善A	杯A	12.8	4.9	4.1	1/2(完)	晴草場		ロロナゾ、底面脚転糸切り、内面ミダギキ・黒色処理	
249	12住	黒土善A	杯Aor線				一部	晴草場		ロロナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	外周黒染
250	12住	黒土善A	杯Aor線				体部	晴草場		ロロナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	外周黒染
251	12住	黒土善A	杯Aor線	14.0			1/7	雲母		ロロナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	外周黒染
252	12住	黒土善A	杯A	13.0	6.5	4.0	1/4(完)	龍母一層脚		ロロナゾ、内面ミダギキ・黒色処理	外周黒染
253	12住	黒土善A	線	13.9	7.4	5.2	5/8(3/3)	淡橙脚		ロロナゾ、底面脚転糸切り、内面ミダギキ・黒色処理	
254	12住	黒土善A	線	14.4	7.5	4.7	1/2(完)	雲母一層脚		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	
255	12住	黒土善A	線	13.6	6.6	4.7	2/3(完)	淡橙脚		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染
256	12住	黒土善A	皿B	13.6	5.9	3.1	2/3(完)	雲母		ロロナゾ、底面脚転糸切り、付高台のちナゾ、付高台のちナゾ、内外面ミダギキ・黒色処理	外周黒染
257	12住	杯轉脚線	杯A	12.6	6.0	3.8	1/2(完)	酒灰一灰		淡灰一淡紫灰	外周黒染
258	12住	杯轉脚線	杯A	12.8	5.2	4.2	1/6(完)	淡灰一黒		ロロナゾ、底面脚転糸切り	外周黒染
259	12住	杯轉脚線	線	15.1	6.6	5.1	2/3(完)	淡灰		ロロナゾ、外周下半部脚転糸へラケズリ、付高台のちナゾ	脚線毛染り、底面黒染
260	12住	杯轉脚線	段線	15.4			1/10	淡緑灰		ロロナゾ	脚線毛染り
261	12住	杯轉脚線	段線	16.4			1/6	淡緑灰		ロロナゾ	脚線毛染り
262	12住	杯轉脚線	線	17.8	9.0	5.8	1/5(1/2)	淡灰		外周ハケメ、下半部へラケズリ、内面ナゾ	脚線行掛け、内面ナゾ・黒
263	12住	土師器	幅B	8.9			1/2	雲母		龍母一層脚	

第5表 墨書土器集計

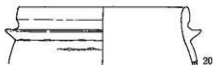
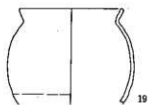
土器	部位				底部外面	内面見込	小計	種類別合計
	正位	逆位	横位	不明				
黒色土器A杯A	3	1	12	7	3	1	27	62個体
黒色土器A杯Aor碗	1		10	11			22	
黒色土器A碗	1	2	4	1	3		11	
黒色土器A皿			3	2	2		7	
黒色土器A鉢A					1		1	
須恵器杯A	1	1	1				3	3個体
灰釉陶器碗					1		1	1個体
合計	6	4	30	21	10	1	72	66個体

第6表 墨書土器一覧

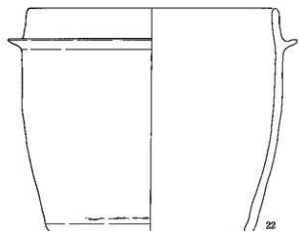
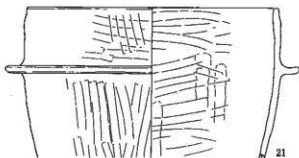
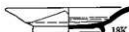
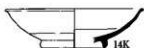
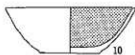
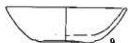
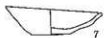
No.	図No.	出土地点	時期	種別	器形	文字	墨書の部位・方向	備考
1	11	2住	11~12	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
2	95	7住	7	黒色土器A	杯A	不明	体部外面・不明	
3	96	7住	7	黒色土器A	杯A	□	体部外面・不明	
4	97	7住	7	黒色土器A	杯A	子由太	体部外面・横位	
5	98	7住	7	黒色土器A	杯A	不明	体部外面・不明	
6	99	7住	7	黒色土器A	杯A	不明	体部外面・不明	
7	100	7住	7	黒色土器A	杯A	□太	体部外面・横位	子由太か
8	101	7住	7	黒色土器A	杯A	子由太	体部外面・横位	
9	102	7住	7	黒色土器A	杯A	子由□	体部外面・横位	子由太か
10	103	7住	7	黒色土器A	杯A	子由太	体部外面・横位	
11	104	7住	7	黒色土器A	杯A	子由□	体部外面・横位	子由太か
12	105	7住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
13	106	7住	7	黒色土器A	杯or碗	子由太	体部外面・横位	
14	107	7住	7	黒色土器A	杯or碗	太	体部外面・横位	子由太か
15	108	7住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
16	109	7住	7	黒色土器A	杯or碗	子由太	体部外面・横位	
17	110	7住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・正位	王か
18	111	7住	7	黒色土器A	杯or碗	子□	体部外面・横位	子由太か
19	113	7住	7	黒色土器A	碗	□	体部外面・正位	水か?
						□□	体部外面・不明	
20	114	7住	7	黒色土器A	杯A	太	体部外面・横位	子由太か
21	115	7住	7	黒色土器A	杯or碗	子由太	体部外面・横位	
22	117	7住	7	黒色土器A	碗	子由太	体部外面・横位	
23	118	7住	7	黒色土器A	碗	子由太	体部外面・横位	
24	120	7住	7	黒色土器A	皿B	賀か	体部外面・横位	
						□	底部外面	
25	121	7住	7	黒色土器A	皿B	□	体部外面・不明	
26	122	7住	7	黒色土器A	皿B	□塵	体部外面・横位	
27	123	7住	7	黒色土器A	皿	子由太	体部外面・横位	
						子	底部外面	

No.	図No.	出土地点	時期	種別	器形	文・字	書寫の部位・方向	備考
28	126	7住	7	須恵器	杯A	鷹	体部外面・横位	
29	149	8住	7	黒色土器A	杯A	衣または花か	体部外面・正位	
30	150	8住	7	黒色土器A	杯A	三か	体部外面・横位	
31	154	8住	7	黒色土器A	杯A	×	底部内面	鏡書土器
32	156	8住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
33	159	8住	7	黒色土器A	碗	不明	体部外面・不明	
34	160	8住	7	黒色土器A	碗	子由太	体部外面・横位	
35	163	8住	7	黒色土器A	碗	三子	体部外面・横位	
						三子	底部外面	
36	168	9住	7	黒色土器A	杯	子/子か	体部外面・横位	
37	169	9住	7	黒色土器A	杯A	⊕	体部外面・逆位	
38	170	9住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
39	171	9住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・横位	
40	173	9住	7	黒色土器A	杯A	□□	体部外面・横位	
41	174	9住	7	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
42	175	9住	7	黒色土器A	杯or碗	秀	体部外面・横位	
43	176	9住	7	黒色土器A	碗	子	底部外面	
44	177	9住	7	黒色土器A	碗	子か	体部外面・逆位	
45	178	9住	7	黒色土器A	杯A	巳	体部外面・横位	
46	182	9住	7	須恵器	杯A	正八か	体部外面・正位	
47		9住	7	黒色土器A	杯A	□	体部外面・不明	
48	199	10住	6	黒色土器A	杯A	信	体部外面・正位	
						酒坏	底部外面	
49	200	10住	6	黒色土器A	杯A	舍	底部外面	
50	201	10住	6	黒色土器A	杯A	𠄎	体部外面・不明	記号か漢字の一部か 酒坏か
						酒	底部外面	
51	202	10住	6	黒色土器A	杯or碗	寛	体部外面・横位	
52	203	10住	6	黒色土器A	杯or碗	□□	体部外面・横位	目、女等の部分がある
53	204	10住	6	黒色土器A	杯A	信	体部外面・正位	
54	207	10住	6	須恵器	杯A	木か	体部外面・逆位	
55	249	12住	8	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・横位か	家か
56	250	12住	8	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
57	251	12住	8	黒色土器A	杯or碗	巳か	体部外面・不明	
58	255	12住	8	黒色土器A	碗	永か	体部外面・逆位	
59	256	12住	8	黒色土器A	皿B	巳か	体部外面・横位	
60	257	12住	8	黒色土器A	杯A	子か	体部外面・横位	168と似る
61	259	12住	8	灰釉陶器	碗	□	底部外面	
62	266	13住	6	黒色土器A	杯A	□	体部外面・不明	
63	288	建6	5~8	黒色土器A	鉢A	不明	底部外面	
64	289	建6	5~8	黒色土器A	杯or碗	□	体部外面・横位	家か
65	290	建6	5~8	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	
66	291	土28	7~8	黒色土器A	杯or碗	不明	体部外面・不明	

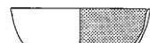
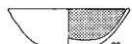
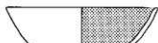
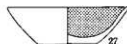
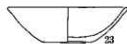
第1号住居址 (1~6)



第2号住居址 (7~22)



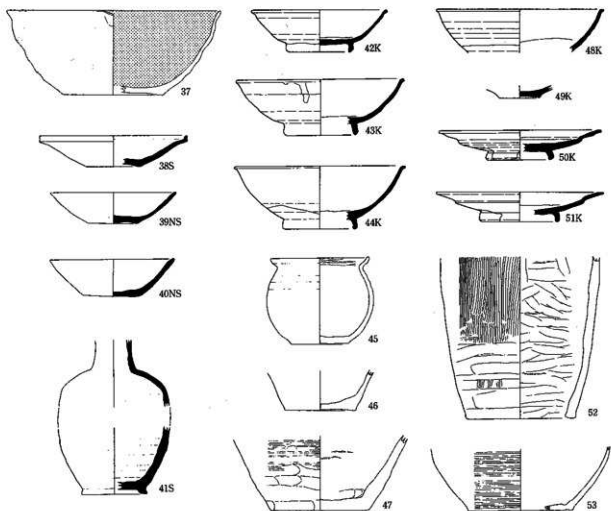
第3号住居址 (23~53)



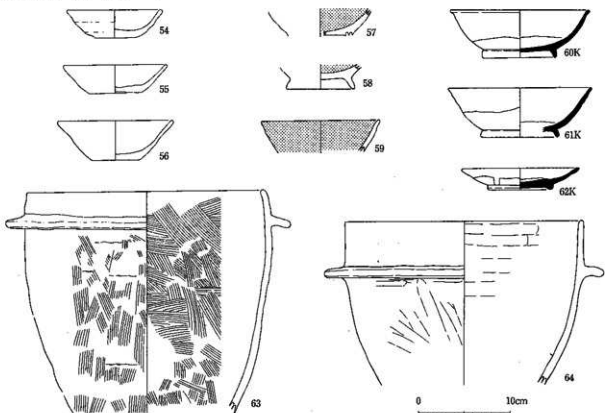
S : 須恵器 NS : 軟質須恵器
K : 灰釉陶器 R : 緑釉陶器

0 10cm

第17图 出土土器 (1)

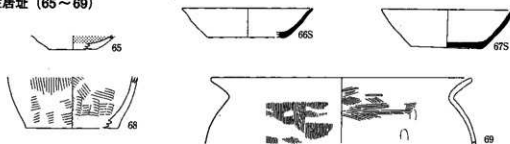


第4号住居址 (54~64)

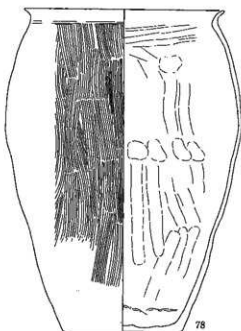
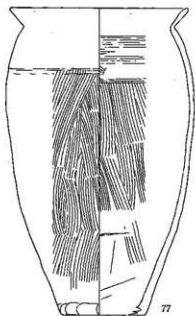
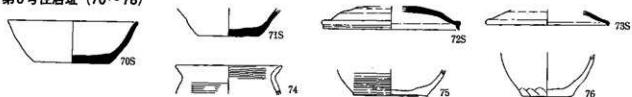


第18图 出土土器 (2)

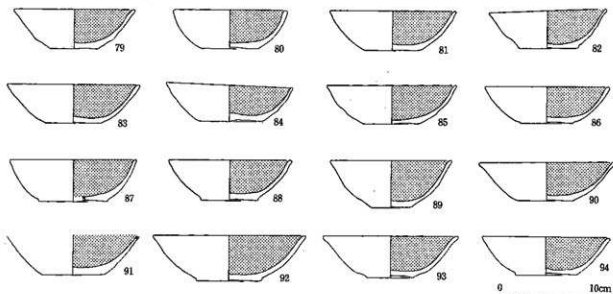
第5号住居址 (65~69)



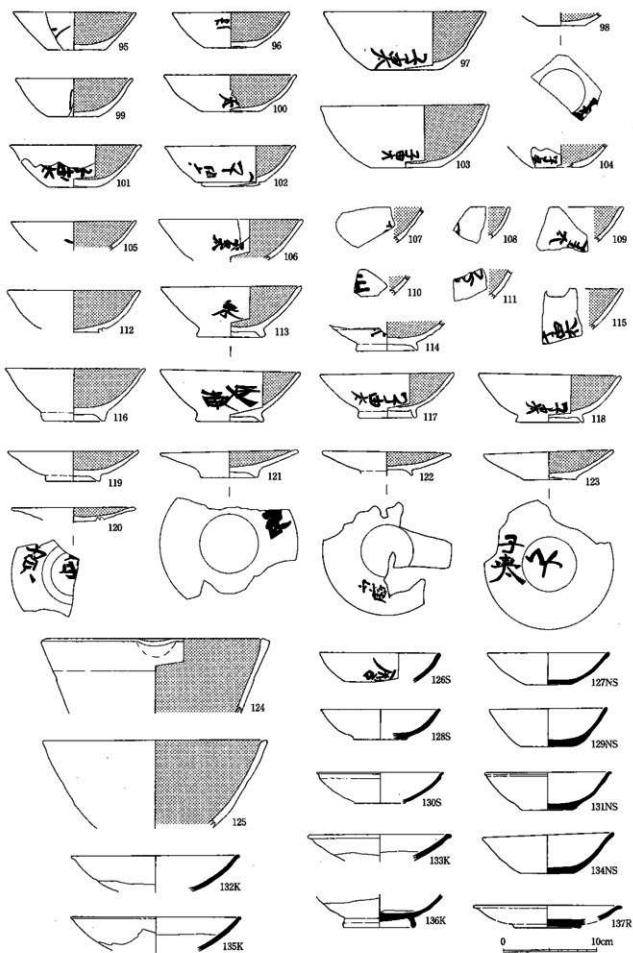
第6号住居址 (70~78)



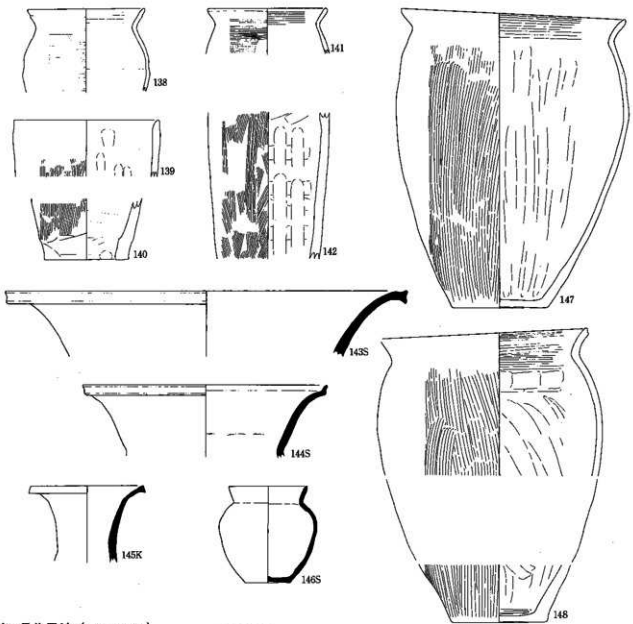
第7号住居址 (79~148)



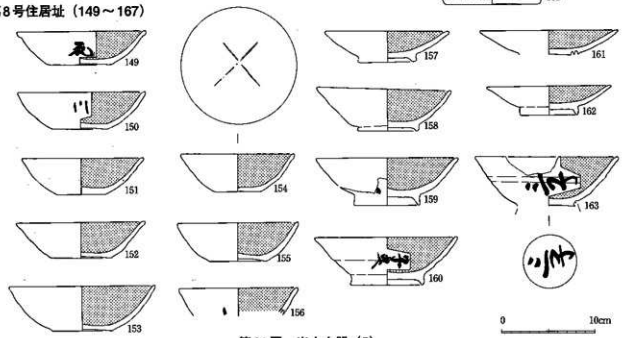
第19图 出土土器 (3)



第20图 出土土器(4)

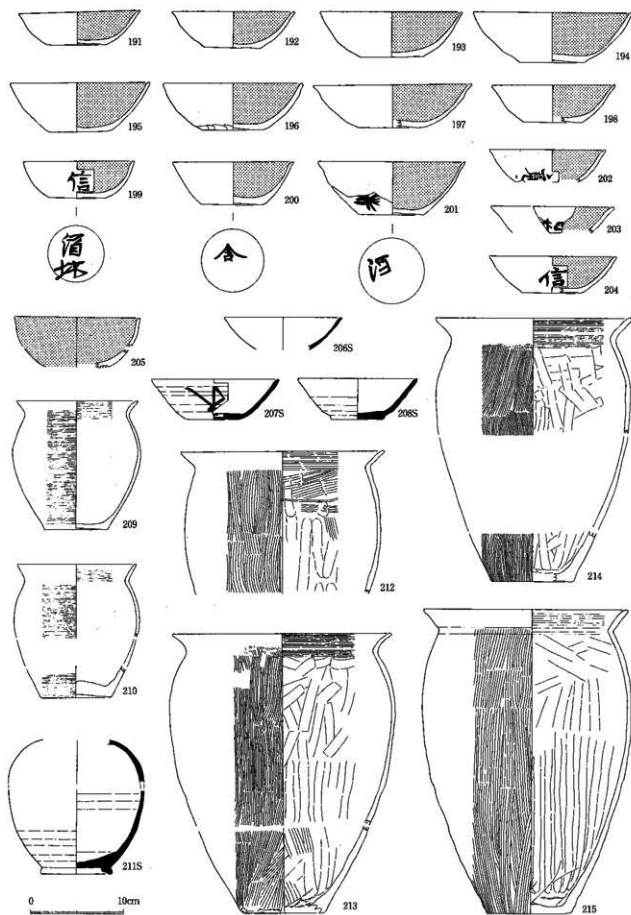


第8号住居址 (149~167)



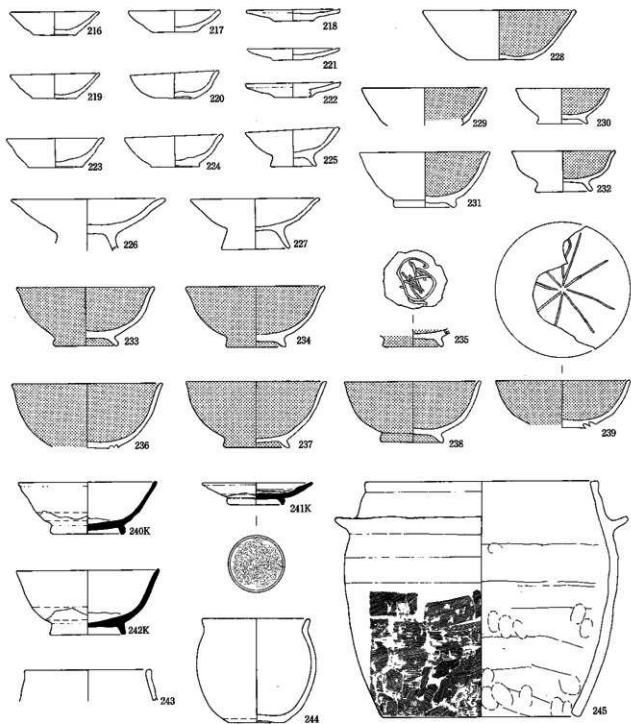
第21圖 出土土器 (5)

第10号住居址 (191~215)

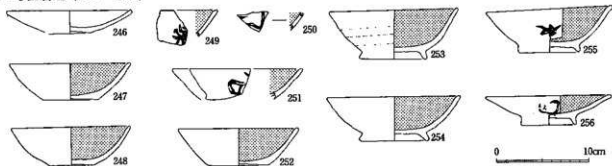


第23图 出土土器 (7)

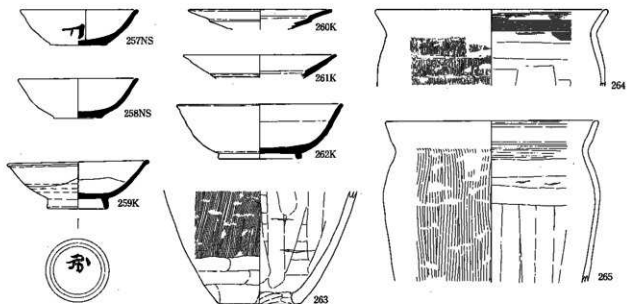
第11号住居址 (216~245)



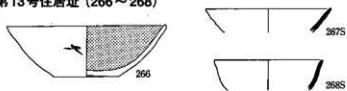
第12号住居址 (246~265)



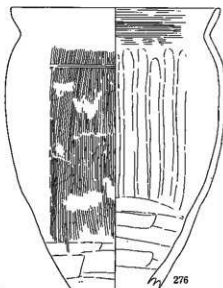
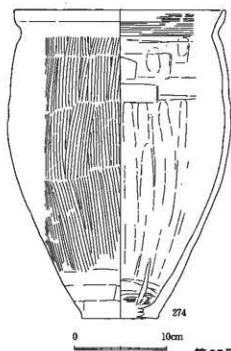
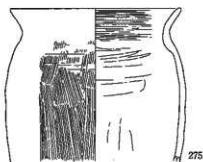
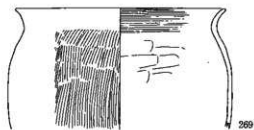
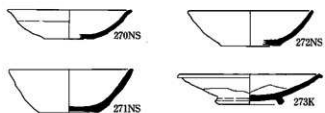
第24图 出土土器 (8)



第13号住居址 (266~268)

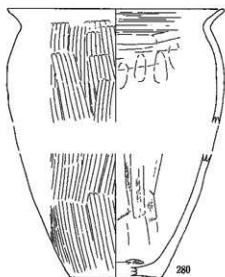
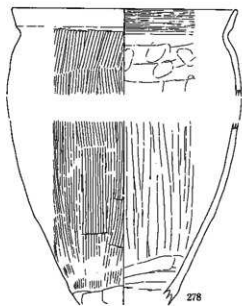
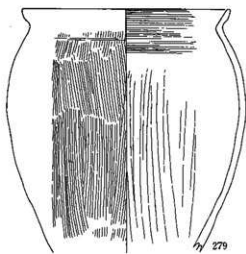
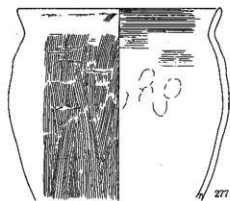


第14号住居址 (270~280)

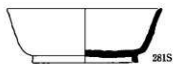


0 10cm

第25图 出土土器 (9)



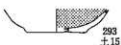
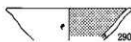
第15号住居址 (281~287)



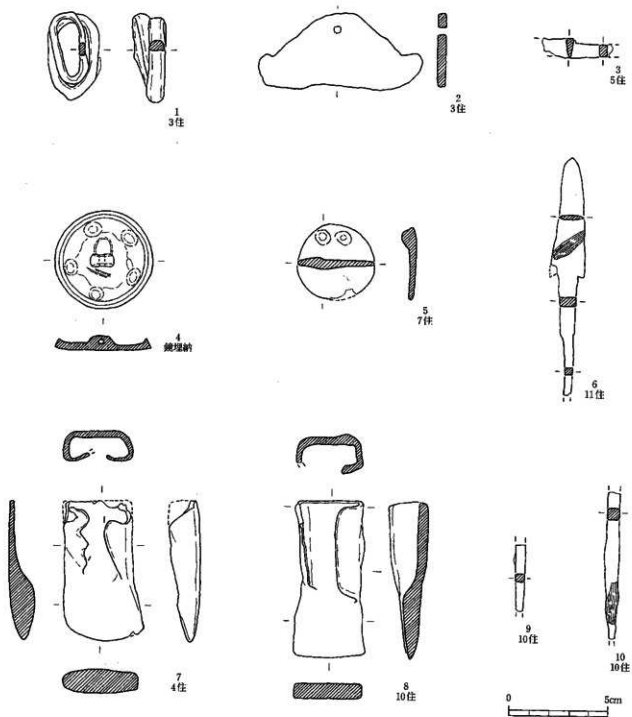
第6号掘立柱建物址 (288~290)



土坑 (291~293)



第26图 出土土器 (10)



第27圖 出土金屬製品

V まとめ

今回の調査は面積としては狭いにもかかわらず、住居址15棟、掘立柱建物址5棟などからなる平安時代の集落を構成する遺構が密集して検出され、非常に有意義な調査となった。最後にこれまでの分析で明らかとなった集落の動きを周辺遺跡の動向もあわせながら概観し、本調査のまとめとしたい。

(1) 遺跡の範囲

兎川寺遺跡における発掘調査は今回はじめての実施であり、遺跡の実態はこれまでほとんど不明であった。しかし本調査ではわずか1,200㎡ほどの狭い範囲から9世紀代と11世紀代の2時期からなる15棟の住居址、5棟の掘立柱建物址をはじめ多数の遺構を検出するに至り、はからずも遺跡の中心部付近にあたった感が強い。そして遺構の状況からみて集落はなお四方に相当な広がりをもつものと考えられる。

ところで本調査地点の南南東150mの位置には針塚遺跡の第2次発掘調査地点があり、ほぼ同時期の集落址が検出されている。両遺跡の間には地形的な隔絶は何らなく、面的に連続している。従って現状では二つの遺跡名が冠せられているが、少なくとも古代においては一つの大きな集落遺跡としてまとまるものと考えられ、南は針塚古墳周辺まで平安時代の集落址が広がっているものと推定される。一方調査地の北北東300mの位置には新井遺跡として平成8年に調査を実施した地点があり、ここからも8世紀末～9世紀前半の住居址4棟、掘立柱建物址、溝状遺構が検出されている。また西に目を向けると7世紀後半～8世紀代の大集落址である下原遺跡がある。同様に東北から南東にかけては9世紀後半～10世紀前半、11世紀代の集落址である堀の内遺跡や薄町遺跡が広がり、同じ地形面上の広い範囲に時期ごとにその中心を移しながら集落が展開したものと考えられる。

(2) 集落の推移

次に兎川寺、針塚遺跡における古代集落の移り変わりについて、周辺の状況を交えながらみてゆく。これまでの調査の見聞から集落の変遷は次のように大きく3時期にまとめることができる。

第1期 8世紀後半～9世紀代（土器編年4期～8期）

第2期 10世紀代～11世紀前半（土器編年9期～12期）

第3期 11世紀中葉～12世紀代（土器編年13期～15期）

第1期は集落の密度が濃くさらに前半期と後半期に分けることができる。以下、各時期の集落の状況について概観することとする。

①第1期（8世紀後半～9世紀代、土器編年4～8期）の集落

前半期（8世紀後半～9世紀前半、土器編年4～6期）

集落の出現、確立期である。7世紀後半に始まる薄川扇状地上の開発が下原遺跡から東へと次第に広がりをみせ、本遺跡や新井遺跡まで及んでくる。

この時期の住居址は兎川寺で5棟、針塚で6棟、それぞれに掘立柱建物址が検出され、遺跡内にまんべんなく遺構が分布する状況が窺える。住居址はいずれも標準的な中型の建物で、調査地内には特に卓越したものは認められない。しかし本期後半に位置づく兎川寺10住からは墨書土器が多く出土し、とりわけ通常の集落遺跡からの出土はきわめて少ないとされる「舎」の文字の存在はそれにふさわしい性格と構造の施設が近辺に存在したことを示しており、この集落が重要な役割を担っていたものと考えられる。

後半期（9世紀中葉～末葉、土器編年7・8期）

集落が発達し高揚した時期である。この時期には扇状地上の開発はさらに上流側へ進み、薄町周辺の堀の内、鎌田、石上、薄町などの遺跡でも大きな集落が形成される。

この時期の住居は兎川寺で5棟、針塚で1棟が確認され、兎川寺に分布が偏っている。注目すべき点は兎川寺では主柱のほか壁柱を有する大型の住居が継続的に営まれる（7・8住）ことで、軒の高い上屋構造は他の住居とは外見上も大きく異なっていたと考えられる。7住からは「子由太」、「磨」など人名に由来するであろう多量の墨書土器や緑釉陶器が出土しており、この建物の性格を示している。周囲の住居址も12住のように主柱を有するものや、出土遺物に多量の墨書土器（8・9・12住）や緑釉陶器（9住）、黒笹14号窯式の灰釉陶器（12住）、刀装具（3住）、転用硯（3・14住）など特殊なものが目立って多く、今回の調査地が集落の中心付近にあたり、また集落内に富裕な識字層が存在したことを示している。

②第2期（10世紀代～11世紀前葉、土器編年9～12期）の集落

第1期を通じて発展した各集落が10世紀を過ぎると急速に衰退をみせ、多くの集落が縮小あるいは断絶する状態となる。この時期に起こる既存の集落の縮小、断絶は松本平や信濃の全般的な現象とされ、本遺跡においても10世紀前半の住居址は針塚で1棟のみいだされるのみとなっている。

空白期を経て10世紀末～11世紀前葉には兎川寺2・4住が営まれる。いずれも比較的規模が大きく主柱を有する形態であり、調査区周辺におお数棟の住居址が分布するものと考えられるが、次の時期へと継続してゆくのか今後課題を残す。

③第3期（11世紀中葉～12世紀代、土器編年13期～15期）の集落

本遺跡においては11世紀中葉以降、再び集落が形成される。今のところ兎川寺で1棟、針塚で5棟の住居址が確認され、後者では12世紀代の住居址が狭い範囲に集中する傾向が窺える。この時期には堀の内、石上、薄町遺跡においても再び集落が形成され、特に石上、薄町の集落では12世紀代に大型の住居址を中心に数棟の住居址がとりまく状況がみられる。兎川寺11住から鉄鎌、針塚9住からは短刀と呼ぶべき大型の刀子が出土しており、集落の成員に武装化の傾向が窺える。こうした平安時代末期における集落がどのように以後に続いてゆくのか、13世紀以降の中世集落址の様相の把握が今後に残された課題であろう。

山辺地区は、正倉院所蔵の「信濃国筑摩郡山家郷・・・・」銘の貢納布、平城宮若犬養門出土木簡、日本後記や日本三大実録にみえる記述など、たびたび文献に登場する地であり、また8世紀末に移庁したとされる信濃国府の推定地の一つでもある。そういった文献上の事件と本遺跡をはじめとする山辺地区の諸遺跡がどうかわっているのか注目されるところでもある。

このような背景もあり、限られた調査成果からあえて集落の動きをあえて追ってみた。周辺遺跡の動向もみることでその推移を把握できたが、薄町周辺の諸集落遺跡の調査成果がまだ未整理でありその実態が明確にしえないこと、今回の調査も含め兎川寺、針塚、新井の各遺跡における調査がまだ断片的で点に近い状況あることから、今後の継続的な調査を通じて古代における薄川扇状地の実像に迫っていかなくてはならない。

最後に本調査に際してお世話になった（株）テレビ松本ケーブルビジョンの関係者の皆様、調査にご協力頂いた地元の皆様に感謝の意を表して本書のしめくりとしたい。

图 版



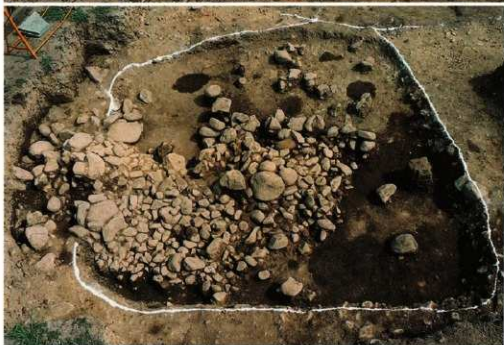
調査地より北東方向、美ヶ原温泉と藤井の谷を望む



調査区全景（拡張前の状況、南から）



調査区北西部
(拡張後、北東から)
中央：12住
奥：13住
左：11住
左奥：建6



第1号住居址礫出土状況
(南から)
カマド部分は礫を積む



同上、カマド礫出土状況
(東から)
表面の礫を除去した後

第2号住居址完掘状況
(東から)
主柱穴がみられる



同上、遺物出土状況
(北東から)
左：土師器椀
右：灰釉陶器皿



第3号住居址完掘状況
(西から)
主柱穴を有する





第3号住居址カマドの状況
(西から)
礫・土器が散乱する



第4号住居址完掘状況
(東から)
支柱穴4基を有する



同上、礫・遺物出土状況
(南から)
礫の分布に偏りがある

第4号住居址カマドの状況
(東から)
内部に土師器杯・羽釜



同上、カマド脇の遺物
(西から)
灰釉陶器椀・皿他



第5号住居址完掘状況
(東から)
張り出しカマドである





第6号住居址完掘状況
(西から)
床に巨礫がみられる



第7号住居址完掘状況
(上方が東)
支柱穴・壁柱穴を有する



同上、礫・遺物出土状況
(西から)
壁沿いに遺物が多い

第7号住居址カマドの状況
(西から)
支脚の抜取穴がみえる



同上、カマド構築状況
基部の袖石と天井石



第8号住居址完掘状況
(東から)
手前で9住を切る





第8号住居址燼出土状況
(南から)
磔周囲に遺物が多い



同上、カマド脇遺物出土状況
(南から)
土師器甕の周囲に杯・碗類



同上、カマドの検出状況
(東から)
片袖を失う

第9号住居址完掘状況
(西から)
柱穴を有するが不揃い



同上、墨書土器出土状況
(西から)
㊦の文字が見える



第10号住居址遺物出土状況
(西から)
壁沿いに遺物が分布





第10号住居址カマドの状況1
(西から)
掘り下げ前の様子



同上、カマドの状況2
火床面上の様子



第1号住居址完掘状況
(南から)
床面中央が一段低い
右奥にカマドがある

第11号住居址磔出土状況
 (南から)
 部分的に磔を廃棄



第12号住居址完掘状況
 (西から)
 支柱穴4基を有する



同上、磔・遺物出土状況
 (西から)
 カマド周辺に遺物





第12号住居址カマドの状況
(西から)
天井部を失う



第13号住居址完掘状況
(東から)
カマドの焼土はわずか



同上、鏝・遺物出土状況
(東から)
遺物はわずかである

第14・15号住居址完掘状況
(西から)
床面上に14住のカマド



同上、礎・遺物出土状況
2棟が切り合っている



第15号住居址カマドの状況
(西から)
内部に土師器破片





第1号掘立柱建物址(北から)
2×3間の側柱式建物



第2号掘立柱建物址(北から)
2×3間の側柱式建物



第3号掘立柱建物址(西から)
他に比べ小規模である

第4号掘立柱建物址(西から)
2×3間の側柱式建物



第6号掘立柱建物址(北から)
総柱式建物



銅鏡埋納遺構断面
ピット内から出土した





土坑3 (北から)



土坑5 (東から)



土坑20 (南西から)

土坑28 (北から)
埋土中に銅鏡埋納遺構が
存在した



土坑35 (南西から)



基本土層 (調査区南壁)
第2図に対応





第15号住居址における食器の構成



第8号住居址における食器の構成 (抽出)



第11号住居址における食器の構成 (抽出)

土師器杯A

左：
土師器碗
右：
土師器盤B左：
土師器皿A
右：
土師器皿
(無台)黑色土器A
杯A黑色土器A
碗



黑色土器A
碗



黑色土器A
Ⅲ B



右：
黑色土器A
Ⅲ (無台)



左：
黑色土器A
鉢A
左：
黑色土器B
碗



黑色土器B
碗

須惠器杯A



70



207

右：須惠器
杯蓋B



208



282

左：
須惠器杯B



281



283

灰釉陶器碗



13



16



242



259

灰釉陶器
皿・段皿



17



18



62



241



土師器
小型甕D



19



45

右：土師器
甕B



209



263

土師器
甕D・
羽釜A



63



245

左：須惠器
短頸壺C

右：
灰釉陶器
長頸壺



146

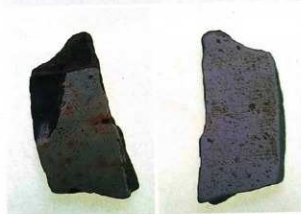


145

緑釉陶器皿
左：外面
右：内面



137



97

左：
緑釉陶器
手付瓶
右：
墨書土器
「子由太」



100



103

墨書土器
「子由太」



104



106



117



118